求道

第四卷
第五號

明治四十年八月二十八日發行（毎月一回發行）
明治三十一年二月二十六日　第三種郵便物認可

求道第四卷第五號目次

求道

◎佛教之眞髓　左千夫
一　人生と自覺
二　絶對の大悲
三　罪惡の救濟
四　涅槃の靈境
五　光明の人生

講演

◎人生と信仰　近角常觀

告白

◎入信前後の回想　小澤一

◎父を失ひ大悲の親を得　自在丸　伊惠子

講義

◎歎異鈔—第四章　近角常觀

歌咏

◎雪子　甲之

◎短詩　紹介

◎哲學と人生◎信仰と修養◎三度の願◎自然の妙趣◎淨土文類聚鈔百六十題決擇記　時報

◎本年の夏期傳道

講話

毎日曜午前九時
求道學舍（本郷森川町一番地）

毎土曜午後二時
第二求道會（九段坂佛教倶樂部）

毎月二日午後七時
第三求道會（日本橋蠣殼町說教所）

夏期中休講
（九月第三日曜開講）

求道　第四卷第五號

佛教の眞髄

一　人生と自覺

余は今日より二日間佛教の眞髄なる題目に付て講演する所あるべし、當所には兩三回も來りて、諸君の熱心に我佛陀の御惠みを傳播せらるゝを目擊して、至極感激する次第てあります。願くは自今互に手を把り如來の御加被の下に同働せんことを希望する所てある。佛教の眞髄といへば佛教經典七千餘卷八十年間の釋迦說法は何事に歸着するか、一代佛教中の眼目は何てあるか、絞り上けたる純粹の眞味は如何なるものなるかを語らんとする所てある。余の見る所に出れは、一代佛教の肝要純粹の眞味は、其高玄幽邃なる眞理の討論にあらずして、佛陀の大悲如來の御惠みを味ふ事にあると信ずるのてある。これ決して眞宗一派の私にあらす、余一己の私見にあらす、全佛教の眞髄根本てあるに相違ないと信ずる。

一代佛教の精髄か結晶し凝結して、涅槃寂靜歡喜愛樂の醍醐を生じたる、其醍醐の妙味は金剛不壞の眞信彌陀本願の慈愛の塊りなることを、親鸞上人は

こゝを以て今大聖の眞說に據るに、難化の三機難治の三病は、大悲の弘誓をたのみ、利他の信海に歸せよ、これを矜哀しこれを憐愍したまう、喩へば醍醐の妙藥の一切の病を療するが如し、濁世の蔕類、穢惡の群生は、金剛不穢の眞信を求念すべく、本願醍醐の妙藥を執持すべきなり。

と說き給ふ、この醍醐の語は涅槃經に出て我佛陀絕躰の大悲を說き給ふには適切なる比喩てある、五味の譬とは牛より乳を出たす、乳より酪を出す、酪より生蘇を出たす、生蘇より熟蘇を出たす、熟蘇より醍醐を出たす、醍醐最上なりと說き佛より十二部經を出たす、十二部經より修多羅を出たす、修多羅より方等經を出たす、方等經より般若波羅密を出たす、般若波羅密より大涅槃を出たす、なほし醍醐の如しと、譬喩を以て實驗的に一代佛教を絞り上げた譬喩てある。即ち一代經を煎じ詰めて味へは佛陀の大悲彌陀の本願に歸入するを祖師聖人か敎行信證に本願醍醐の妙藥なりと說き給ふもの、實に深遠なる理由の存するところてある。

偖佛教の眞髄に付て講述せんとするに、五席に分ち五章を

作りて御話すべし。

第一、人生と自覺
第二、絕對の大悲
第三、罪惡の救濟
第四、涅槃の靈境
第五、光明の人生

先つ今席述べんとする人生の自覺とは何事をいふか、現時に於ける思想界の趨勢を見るに、一方に奮鬪主義を主張するものあり、他方には理想主義なるもの流行するか如し、奮鬪主者理想主義敢て惡きにあらす、只これを實行するに當て齟齬衝突多く、其結果は苦悶に終らすやと懸念にたへす、否懸念にあらす、滔々たる世上皆この現象を呈し奮鬪も理想も現實にせられす、空しく煩悶に終るもの此々皆然りてある。これは何故てあろうか、余か信するところによれは、人生は自己の力量を頼みて立たんとするは不可能てある、然るに世人は薄弱なる此身此精神を重視して、目的を遂らんとするのてある、故に主義と實行の不一致を來し、頭々苦悶し絕望の極自滅自殺を圖るもの少なからす、是等皆自ら招くところにして、可憐の情に耐へす。人生に處し而も完全に人生を渡らんとせは人生以外の光明の力を假らさるへからす、換言せは佛陀の慈悲と智惠に據り、全く救濟せられて其光明の中に此世界の仕事に從はねはならぬ。人生の苦惱は如何に排除するか人生の缺陷は如何に處理するか、此大悲光明の威神力に由る外は、奮鬪主義も理想主義も其用を爲すところなし、光明已外を認むるは畢竟自力の小なる計ひに過ぎざることを覺るか即ち人生の自覺てある。

佛教に曰ふ、佛陀とは覺者の意てある、自覺者てある、根本的に自覺せられた人てある、自ら覺るのみならす、他をも覺せしむる力ある人てある、自覺覺他覺行究滿これを佛陀といふ、故に佛教はとりもなほさす自覺の教なり。佛陀は如何なる自覺をなせしや、佛陀十九歲にして生老病死の四相を目睹し、これを自己身上に引當て苦悶し、其解決を待へく出家し給ひしものてある、佛陀出家入山の後はあらゆる惡魔と戰い、百千の障碍を排して、遂に正覺を成し給へり、其際の狀態を佛陀自ら平易に說明し給ひしを見るに、初めは闇黑四邊を被ひしか、忽ち一道の光明來りて无明を照破せり、是の光明こそ佛陀の自覺にして、人生の指導者なり、吾々か人生の崎嶇險難に艱み、其苦心慘憺に泣くは、元是れ理性暗く、

煩惱の闇黑四邊を閉ぢたるに由れはなり。今二道の光明來りて吾々の无明を照破し、其執るべき道を教へ、往くべき目的地を示さるゝに至れは、吾人の喜び如何ばかりであらうか。人生の苦悶は此佛陀の慈悲と智惠を仰き信ぜざるより來るものといはねばならぬ。

要するに佛教とは自から覺り、又他をして自覺せしむる所の教である、故に吾々は堅忍不拔自から修して自から達すれば必らず自覺の境過に至らん、これ自力聖道の教である。然し我身は唯如來の加被力を仰き、佛陀自覺の光明に由り攝取不捨の大益を得て、涅槃佛果の彼岸に至るの外はない、人生の苦痛に泣き不幸を嘆じ居るもの、此大悲の光明に逢はされは、成佛得脫の期はなかるへし、何の爲めに奮鬪し、何の爲めに向上發展するか、唯薄弱頼みなき凡夫の身を頼みて、人生を圓滿に解決し佛陀證果に達せんとするは實に覺束なき限りである。「釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが无上の信心を、發起せしめたまひけり」佛陀の大悲如來の御惠みに由らされは、吾々此闇黑の牢獄を出て焰々たる火宅を脫することは出來ぬと確信するところである。

二　絶對の大悲

今席は絶體の大悲に付て陳ふへし、已に朝席に於て講述せし如く、佛教の眞髓は何れに在りやと云へは、人生を自覺して、絶體の大悲に歸入したるものこそ、佛教の眞味眞髓を得たものである、生死問題、其他喜ふへき悲むへき種々の人世問題に接して、初めて如來の慈愛を知り、自覺して光明攝取の大益を得るか佛教の目的で、如來廻施の大慈を以て、絶對に救濟せらるゝは他力本願の力である。

自覺光明の根本は佛陀なり、佛陀の御惠みといふは絶體の大悲是也、佛法には三寶に歸依すと說く、結局南無佛の一に收まりて、即ち南无阿彌陀佛に歸依するなり。此六字の中には一切の諸善、深遠なる佛教も皆包含せすところなし。法然上人は善導大師の一心專念彌陀名號行住不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故といへる文を見出したまひし時、大自覺に入りたまふ、此の順彼佛願故の文は、法然上人、獨特の見地といふも不可はあるまい、抑々南無とは歸命即ち頼む、阿彌陀佛は平たく曰へは親樣と呼ぶと同然である、故に法然上人以前の念佛は皆親を求むるの聲である、然るに今順彼佛願故の文によりて親の我等を求むる本願を見出されたのである、元來佛陀の證果を得んには願行具足せされは不可なり、

今此六字は願行具足である、然れども我等が佛に向ふて敢て發願回向するにはあらず、人世の苦酸に泣き、崎嶇に惱みたるものに對して、佛の大悲を以て攝取不捨と光明懷裡に抱き給ふ大悲の本願なれは此歸命も發願も皆如來大悲の召喚の聲、即ち六字名號にして、順彼佛願故は其如來の召喚の聲に信順するをいふたのである。

永覲律師は口に念佛の聲を絶たず、心常に彌陀を念ず、其「往生十因」の中に曰く、勝道上人叡山に在りて、七月十五日夜異香荐りに薰じ、靈告を感せり、曰く吾是播州加古川の沙彌教信なり、今方さに西方淨土に往生すと、直ちに播州加古川の邊に到り、其跡を求むるも得す、河邊に一草庵あり、今しも一傍父死せりとて、老婦と一兒其側に侍座し啼泣す、其遺言を聞けは我死すれは死屍をすて、禽獸の餌に供すべしと、此人即沙彌教信なりし、篤信求法の行者、人呼んで阿彌陀丸といふものなりし、親鸞聖人の我は沙彌教信の掟なりとの給ふもの此人なり、かくの如く淨土門の開けさる先きに念佛往生の人多し、されど此人々は佛智の无邊を信じ唱名念佛懈るところなけれどもやはりもすれは唱名して佛を求むるのきらいなき能はずである、發願回向の振舞に近きことがある、これを法然上人に到て順彼佛願故と、佛願に信順し歸依する一念の外往生の因なく、敢て凡夫の方より參らせる回向するの意にあらすと說破せられたのである。

敢て此方より求むるに非ず、佛より求めて下さるなり、故に佛願に順ずるばかり、御惠みに感じ打たれ、難有や南无阿彌陀佛と感謝するばかりである、昔の中將姫や教信も皆自ら求めてあるいた、石童丸は父をさがして諸方を徘徊した、父は求め捜すに及はす、眼前に居るのである、今道心刈萱は現に我子と思へども、子は親たることに氣が付かぬのである。善導大師の若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生とは即ち親か現前せられた有樣である。法然上人撰擇本願念佛集を製作し、絶對の大悲、純他力を鼓吹し給ひ、唯佛願に順じ、往生一定と信知して、念佛するのみと勸唱し、親鸞聖人に至ては、歸命者本願招喚之勅命也と說き、發願廻向者如來發願回施衆生之法也と喝破し給ふ、爾者若行若信無有一事非阿彌陀如來淸淨願心之所廻向成就と說き給ひ、晚年に至ては常に何事も如來の御はからひなりと悅び給ふ、法然上人は念佛を勸め給ひ、親鸞聖人は其南無

阿彌陀佛を信ずる信仰を本とせられて一代發見せられたのである。

此意を人生の自覺に付て適切に例證せは、宇都宮の某訴訟事件の爲め東京に控訴し入獄の身となり、此人初めは宗教を知らざりしも、求道の途に就き、始めは觀音經を讀ひこと一日に百遍、十日に千遍、熱心讀經に從事し、其功德を想ひしが、『信仰の餘瀝』を讀み大に感ずるところあり、是迄の罪惡を懺悔して、其罪を自覺し控訴して罪を免かれんどころか、惡中の惡人なりと悉とく罪狀を自白し、加之監獄は毎なり裁判所は父なりと無二の懺悔に住した、初めは觀音經を讀みて無罪を求めつゝありしが遂に我身の無罪を希望する此卑劣心が一轉して、我身は大惡人なりと氣が付き、唯如來大悲を仰きて斯るものが大悲の力によりて、自己の惡しきに氣が付いたことを感謝する樣になつた、此處か絶對の大悲か屆たのである、法然上人の一心專念彌陀名號の。專の意味である、和讃に『極惡深重の衆生は、他の方便更になし、ひとへに彌陀を稱してぞ、淨土に生るとのべたまふ』敢て求むるに非す、大悲は向ふより來りて我を救ひたまふのである、法然上人か聖道諸宗の迫害に遇ひたまひしも畢竟此大悲一佛の外なしと主張したまひし故である、親鸞聖人に至て其大悲の有樣をは光明名號の父母と譬へて、其慈父悲母より信心が生すると示された。其教行信證の行之卷に於て、懇ろに此意を敷衍せられてある、一言之れをいへは、我等の心に如來の御慈悲難有やと喜ふのみである、已に禪宗の如きも作佛と計る勿れの語あり、唱へて助からんと思ひ、喜んで助からんと、種々條件を以て如來に向ふのではない、人間の小さい行を以て、絶對の大悲に向ふは慙づべきとてはないか、而し敢て唱ふる勿れと謂ふに非ず、此念佛は信仰の上より自然に流出する法德であると思ふべきなり。

嘆異鈔に『念佛は行者のために非行非善なり、わがはからひにて行ずるにあらざれば非行とへふ、わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ、ひとへに他力にして自力をはなれたるゆゑに、行者のためには非行非善なりと云々』これに由りて見るも行者のはからひにて行ずる念佛にあらず、唯歡喜讃仰の餘に流出する念佛である、信ずるにも力味(りきみ)はない、唱ゆるにも力味はない、自然の儘難有やとうとやと口に浮ぶを報謝大行の稱名といふ、飛きに七里恒順師の寺に詣て歸途又後藤祐護師の墓を展せり、兩師は兩本願寺内の高德名士なるか、七里師の常に口にせられたるが『彌陀大悲の誓願を、ふ

かく信せんひとはみな、ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛をとなふべし、』との和讃で、後藤師は前申上げた『極惡深重の衆生は、他の方便更になし、ひとへに彌陀を稱してぞ、淨土に生るとのべたまふ』の和讃で、常に稱名念佛してうつくしき大往生を遂げられました。敢て多く稱ふるの意てはない、憶念の心つねにして佛恩報するをもひより、自然に流出するのである、彼耳四郎如き大惡人も、眞に罪りに就き居る際も、不知不識念佛をして居る、決して故意に勵み特に勉むる如き狀態ではない、身は已に絶對の大悲に抱かれ居れば、唱ゆるも大悲、唱へさするも大悲、聲の高低多少に由るにはあらず、元祖上人の念佛を、大悲の信仰なり、絶對の顯現なりと說破し給ひし親鸞聖人の高見卓識、仰きても餘りあるてはないか。

三　罪惡の救濟

佛教の肝要は如來の御惠を味ふのて、人世の實際に付て實驗し自覺するのてある、火はあつい、氷はつめたい、親切は嬉しい、不親切は悲しいと、知るのてある、手段や道中に滯まりてはならぬ、直ちに絶對の大悲に氣か付き、自己は罪深く不完全で、冷酷てある淺ましい、惡かしいと佛光に接し、佛恩に感じ、初めて救濟にあづかるのてある、此れを罪惡の救濟といふ。

今夜は此罪惡の救濟を陳べんとする初に當て、余か如來の御惠みにあづかりし實驗談を話すへし、此事は小著懺悔錄に記載し、且二度三度講話したれば、諸君は已に御存知のことならんも、能く話さざれば承知がならぬ、此懺悔錄を讀み信仰に入りたる人も尠なからざれば、一應其徑路を陳べ、猶進んて親鸞聖人の信之卷について御話致すべし。

余は學校時代にありて此の如き佛教夏期講習會なるものを發起し及ばずながら宗教界の腐敗を救はんと二十九年から三十年にかけて東奔西走しました、全體此事件の爲め盡力する以上は、或は一生涯學問も放擲せねばなるまいかと思ふた位てあつた、然るに此改革等のことか動機となりて、眞實に御恩を喜ふ身になつた、諸君の入法も種々な動機あるべし、商業失敗、或は他の方面にても宜ろし、それが因緣となりて求法の道に入られんことを希望します。明治三十年には此奔走の結果にや、神經衰弱となり、身躰か無暗に疲れ、胸中が何んとなく淋しく、苦しく感ぜられ、人を疑い、人を惡み、又他人が余を惡み或は輕蔑するように思はれ、胸中一點の光明

なきのみならず、世の中が暗黒のように思はれ、慈親もあるがたからず、兄弟朋友も信ぜられぬといふ光景となり、如何なるものが好意を以て來るも皆悪意を以て之れを迎へ、見るもの聞くもの悉とく不快の種子ならざるなき狀態に沈んだ、此時の狀態は人間の悪意悪念皆備はらざるなく感ぜられ、胸中寂寞天地晦冥であつた。

此の如き時若し一歩をあやまれば口腹の慾に耽り慰安を物質に求むる所謂墮落の場合に立到るのであるが、余は幸ひ其方面に向はざりしは今に於て如來に感謝するのである、胸中は邪悪の分子が充ちく、世間は勝手なものだと世を怨らみ、人を憎み、釋尊降誕會を修するも喜ひの心なく、夏期講習會へ出席するも面白く感ぜられず、其内遂に大病を惹起して日夜苦惱する、胸の内はますく煩悶する、誰一人此病氣に同情して呉れるものがない樣に無意識に考へ出した、大經五悪段を讀めば、一字一句皆自分をせめるように思はれ、佛陀を拜するも難有からず、後ちには我臨終近けり我命已に死せり、いつそ自殺して果てんかとまで淺間敷思案を極めたのである、然るに明治三十年九月十七日病院よりの歸途、車上から虚空を眺めて何んとなく氣が晴々した、今迄は豆粒のような心であつたものが、俄かに雲中に引込まれるようになり云ふに云はれぬ愉快な氣持が出來た、廓然大悟といふものでもあるまいが胸中が大ひに開けて、何んとなく嬉しくてならん、家へ歸れば皆々が余の顔色の一變せるを見て、大ひに喜んで呉れた。

爾後つら〳〵世上を觀するに是までは眞の朋友眞の同情者を求めんとして得ざりしは、佛陀を餘所にしたからである、人間同士の交際は元と淺薄のものである、此方は一寸隔てをおけば彼方亦一寸隔てを置く、我か怒り怨めば彼亦怒り怨らむ、畢竟不完全の人間の交際はかくあるべきである、然るに無限大悲の親樣は此方が遠かれば遠かるほど近づいて下され、振り切て逃げんとすれば益〻慕い求めて、攝取不捨とはなし給はず、斯かる親切なる御方があるにも關らず、世を怨み人を悪くみ、心淋しく今日迄煩悶せしは、如何にも淺間敷限りである、愈後悔懺悔の思に住し後年靜觀錄を書きて此信仰を告白したのが信仰の餘瀝の第一章宗教的同朋である。

多くの人が煩悶狀態を罪悪觀といふは違ふて居る。其故は煩悶苦惱の時深く自己が罪悪を自認するよう思ふべけれど、此時は眞に罪悪を思ふものではない、如來の救濟にあづかり安心立命して後初めて自己の罪悪を知り得るのである、煩悶する間は他人の罪悪を認める、自分が親切なるに彼れは何故不親切なるや、或は自分は充分に注意はいかぬにしても先方は今少しく注意すべきであると、向ふの人先方のものをとがめ迫むる間は、假令ひ自己の罪悪を思ひても、眞に自己の罪悪を認めたとはいはれぬ、他をゆるし人を恕するようになりてこそ、初めて自分の缺陷が自認せらるゝのである。

今大悲の親樣に向へば、全然の慈悲全然の救濟である、我身はわろきいたづらものなりと思はざるを得ぬのである、此點から見れば、人間同士は五分五分である、多少の相違懸隔はあるにしても、五十歩百歩彼此皆罪悪である、一心專念彌陀名號の專の字が肝要だ、自分を忘れ、他人を忘れ、專ら一向に大悲の親樣に立向ふのである、此處まで到達して始めて自己の罪悪を認め、眞の懺悔が出來るのである、又他人を感化せしめ得るのである、此感化力は自分の働きにあらず、絶對大悲の加彼力の然らしむるところである。

善導大師は、我身現是罪悪生死凡夫、曠劫以來常沒常流轉、無有出離生死之緣、と機の深信を述へられた、自分の手元を眺むれば、斯かる放縱無慚のものが、如何にして佛果を得べきやと、只あやぶみをそるゝのではない、此煩悶苦勞は佛智不思議の力によりて知らず識らず消へ失せる次第である、如來の大誓願に向へば、善もほしからず、悪もきらいなし、何んぞ區々小さき自分の胸に拘泥して、大丈夫なる願力の不思議を疑ふべけんや、嘆異鈔に「彌陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし、そのゆゑは罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします、しかれば本願を信ぜんには他の美も要にあらず、念佛にまさるべき善なきがゆゑに、悪おもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆゑにと云々」此御文のこゝろを玩味し給ふべし。

次きに親鸞聖人の三心釋に付き少しく講話せば、至心信樂欲生の三心と區別すれども、只大悲他力の親心である、至心は眞實誠種之心にして、疑蓋雜ることなきなり、信樂は信ぜば疑はず、樂は愛樂にして、欲願愛悅又は歡喜賀慶の心なり、欲生とは成作爲興又は大悲廻向の心なり、此三心は元是如來大悲の三心にして、衆生爲作の三心にあらず、衆生凡愚の胸中は虚假不實にして、清淨眞實の心は毛頭起るべきなし、只大悲の三心我心に映じ給ふ故に、雜毒虚假の凡夫も一轉して佛果を得

せしめ給ふなり、是純他力の意は親鸞聖人懇篤に教誨し給ひ善導大師不レ得下外現二賢善精進相一内懷虛假上とあるを律法主義より信仰主義に一轉して不レ得二外現二賢善精進相一内懷二虛假一と御示しなされ、淨土眞宗の宗風を作られたのである、吾々は永く生死海に沈淪して如來の御心を疑ひ、他よりは隔てられぬに自分より隔てゝ、眞實の親樣にめぐり逢ふことが出來ざりしなり、今日は親樣の方より名のりを擧げて、寂しぶりに親子名のりを得たのである、至心信樂欲生の三心、即ち信も愛も望も皆絶對大悲の惠施せられたるものである、此大悲の催促なければ、斯かる邪見憍慢の惡衆生か懺悔の心を起し、欲生彼國の大菩提心を起し得べけんや、彼阿闍世王の苦悶も入法も、皆佛智誓願不思議の爲さしめ給ふところと感謝せねばならぬ。

四　涅槃の靈境

昨夜は罪惡の救濟に付きて申述べたり、今席は一歩進んで涅槃靈境といふことを語らん。

近來多くの者のなかに、眞如といへることについて誤解をなし、この誤解が原因となりて、多數の青年者信仰を求むるものゝ妨害となりて居るかの如く思はるゝ、眞如は世界の本體なり、宇宙の實在なりといふて、この實在の眞如こそ我等の所謂佛なりと思考せるが如し、此れが爲め佛教は全く哲學的に解釋せられ、信仰方面よりは乾燥無味のものと變化したるよう思はる、これは佛教の本旨であるまい、斯る誤解を生するに至りたる所以は、西洋哲學の宇宙を說明せんとする解釋法を、直ちに佛教に用ひ來り、眞如は實在である、本體であるといふように言做した、其結果は本體も、實在も、神も佛も、天も、皆同一物と說明せねばならぬようになつたのである。

起信論には、眞如は諸法の躰なりと說けるか故に、眞如を以て哲學上の所謂本體實在と思考するは、一應道理あるようなれど、其實眞如とは佛陀の證悟の境界より眺め給ひし世界である、佛陀の妙境界を指して眞如といひしものである、この眞如に迷の雲のかゝりたるを無明と呼ぶのである、眞如は淸淨、無明は汚濁、非常の大差がなければならぬ、然るに哲學上の本體と現象は此迷悟染淨の區別あるものにあらず、此點より論ずるも、本體と現象との關係を用ひて、直ちに眞如と無明との關係を說かんとするは誤解ではないか、佛教は今日の世界の說明のために生れたるものではない、佛陀の妙境

界の相を說かんが爲めに佛教は生れたのである、一般佛教者が眞如を以て宇宙の本體なりと論し、其結果として神も、佛も、天も、皆本體實在と同一視するに至ては佛教を賊するものといふも不可なしと信ずる、此等の誤解より青年者か眞の信仰に入る能はざるは慨嘆の極みである。

次に涅槃とは如何なることゞ、涅槃は梵語譯して滅度といふ、滅とは迷の滅亡したるをいふ、迷を滅亡したるの妙境界を滅度といふのである、これ涅槃なり、これ即ち佛教の目的地なり、最後の至極地なり、この目的地に達するを物質論にて說明するは俱舍論にして、唯心的に說くは唯識論である、若し佛教をして哲學ならしめは俱舍論と唯識論とは相反するの議論でなければならぬ、然るに佛教では二個の相反する議論を說きながら、相反せざる所以は、唯一の涅槃界無我界に達せんが爲めの說明であればなり、この涅槃界こそ眞如界である、佛の妙境即ち靈境である、世上眞如を哲學的に說き、遂に佛教界を混惑せんとするものがある、戒めねばならぬ、此大乘起信論は議論理窟の爲めに生れたるにあらで、信仰を起さしめん爲め起りしものである、同論の修行信心分を見ても容易に合點が行く、佛教々典は皆信仰に入るの媒介である、只空理空論を弄びて居りては轉迷開悟の得益は得られぬ、涅槃の靈境に遊ぶことは出來ぬ、和賛に『聖道權化の方便に、衆生久しぐとどまりて、諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ』と、諸君須らく議論をすてゝ實際に付き信仰を得たまはんことを希望す。

涅槃は無明煩惱を拂ひたる滅度、即ち眞如の光明界なるに吾々惡凡夫三毒五欲に纏はれ、地獄業のみに齷齪たるものが如何にして此境界に到達し得へきや、此點が佛教の眞髓にして一度如來の慈悲を信すれば、淸淨眞實の佛心を戴き、一切功德の根本たる名號六字の主となりて、安養淨刹の往生を遂ぐるのである、煩惱あれども自ら消えて、煩惱は自力を以て斷滅するに及はず、正信偈の能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃の意の如くである、絶對大悲の救濟を仰き一念よろこびの心が發起すれば、自から煩惱を斷するの心配もなく自然法爾に煩惱の氷とけて、涅槃眞如の靈境に至ることを得ると說き給ふ、此煩惱は未た信仰に入らざる初こそ怖るゝに惡むべきなれど、一度大悲の御手に助けられ大安慰を得たる身は、煩惱はもけて却て益々大悲の御惠みを頂き大願業力の不思議が顯はるゝ、此意を和讃に『无碍光の利益より、威德廣大の

信を得て、すなはち煩惱の氷とけ、即菩提の水となる』又『氷多きに水多し、障多きに德多し』と說破せられてある。

又佛敎に說く處に由れば、涅槃に二種あり、一に有餘涅槃二に無餘涅槃これなり、釋迦如來の如き在世の時已に有餘涅槃に入らせらるゝ、死せる時に至り始めて無餘涅槃に入るのである、今念佛の行者一念發起の信決定の時、不斷煩惱得涅槃の境界に在りといへども、未だ眞の佛とはいふべからす、此肉身の終るときを待て、始めて無餘涅槃に入ることを得る、然れは信後の身分は有余涅槃に在りと思ふべし、又和贊に『如來はすなはち涅槃なり、涅槃を佛性と名けたり、凡地にしてはさとられず、安養に至りて證すべし』吾々一度法性涅槃界に至るを得は、再たび此土に還り種々の身相を現して、濟度衆生の大行に從事せらるゝ、和贊に『安樂淨土にいたるひと、五濁惡世にかへりては、釋迦牟尼佛の如くにて、利益有情はきはもなし、

五　光明の人生

毎席述ぶるが如く、佛敎の眞髓は何なりやといへば、如來の慈悲慈愛を心中に感得したのである、これ絕體の大悲にして、人生の自覺である、吾々の罪惡は救濟せられ、軈て涅槃の靈境に到ることを得る、此境遇に在るものを光明の世界と呼ぶ、斯の如きは底下凡夫の自力心にては達し得べからざれば、絕體大悲の他力妙用に由るの外はない、只々不思議といふのみてある。祖師聖人を仇敵視した辨圓が、板敢山の半腹に待構へて危害を加へんとするも、其機を得ず、先づ此不思議に出會して信仰を喚起せられたのである。御傳抄に『彼山にして、度々相待といへとも更に其節をとげずつら〳〵緣の參差を案ずるに頗る奇特のれもひあり』と說いてある。辨圓止むを得ず稻田の庵室に尋ね參りたれば、聖人左右なく出逢ひ給ふ、これは虛心平氣胸中に些のさしはさむところなく面會し給ふといふことなり、如此は人間と人間の交際では出來まい、吾れを害せんとする敵人に何の防禦することなく、相會するが如きは、人間の所作ではない、聖人は實に絕對大悲力の顯現である、故に之れに接せし辨圓は害心忽ち消滅して後悔の涙禁しがたく、刀杖をとり、頭巾をすて柿の衣を更ため、即座に佛弟子となつた、豈不思議ならすや、上の和贊に『无碍光の利益より、威德廣大の信をえて、かならず煩惱のこほりとけ、すなはち菩提のみづとなる』とあるは是である、かゝる大惡人は其惡に強きが如く、善にも強よくして、後ちに明法房と呼はれ、聖人常隨昵近の御弟子となつた『罪彰功德

の體となる、こほりとみづのごとくにて、こほりおほきにみづおほし、さはりおほきに德おほし、』

茲に注意せねばならぬは、人間は得手に聞て勝手に行ふものであるから、佛陀の慈愛は罪惡深重のものだけ加被力も強いと聽聞し、惡人正機の本願なれば少々の罪惡は見逃していたゞかれると思ふて、放縱无慙なるは心得違の甚だしきものである、一度大悲の御胸を窺ひ知りたるものは、斯かる不埒な意見を持てはならぬ、慎まるゝだけ慎み勵まるゝだけ勵まねばならぬ、源信僧都の御語に、煩惱即菩提といふて無慙無愧のものはあるか、偖生死即涅槃と此世を見捨つるものありや、人間は兎角得手勝手のものであると敎訓せられた。

人間と人間は互ひに我執を募り、まけじ劣らじと推合ふゆへ事毎に、杆格衝突するので、彼此善惡共に不可てある、佛の大悲は爭ひ給はす、而も其成効は駭ろくべきものがある、之れ絕對の大悲なれは、善惡邪正もなく、一如の眞海に躋入すれは、煩惱の衆流なきか如く、光明の人世は期せずして得らるべきてある、其例は余か實見せるもので御話するも澤山なり。

東京玉川の上水に羽村といふ處に、一人の求道者か出來た此人も初めは世界を悲觀し、煩悶苦惱の中に消光せしは、昨夜余が懺悔せし事情に異ならず、何人に接するも同情の念なきか如く思はれ、我は孤立なり相手なしといふ如き寂しき心地となり、遂には爵懷を遣らんと酒を煽る、精神は益々紊亂し、内を外にして愛すへきを愛せず、親しむべからさるに親しみ、遂に手の付けどころなき有樣となりしが、不思議にも一朝如來の御慈悲に接して、打て變りたる淸淨なる人格を得やさしき殊勝なる人となつた、最早酒を飲まぬてはない、飲まれぬようになる、遊びたきに遊はぬてはない、遊ばれぬようになつた、村内に消防の稽古をなすとき、人後にありて水を酌む仕事を爲す、敢て功名を貪らぬ、虛譽に迷はぬ、水を灌くものは多いが水を酌むものはないと、隱れて働らく殊勝の心がけと謂はねばならぬ。

又次に同じ羽村に、一人の靑年ありて、一日私と共に山中に散步したが、突然不作五逆不得入法といふことは佛法にありやと問ひ出した、其胸中には可怖苦悶ありしもので、此人の親なるものが嫁と不和にして、一再ならず放逐したれば、夫がためにいたく親の命令と自己の情との間に煩悶したものてある、私は之に答へて、如何にも人生的に無理はなけれども、

自己の考のみを正しとは思ふべからず、人間の不完全なるを説き、佛陀无涯の大悲に逢はざれは、此世の憤恨怨嗟は消滅するの期はあるべからざるを懇誠したれば、宿縁熟して却て一家の爭止みて大平和を來した、後ち嘆異鈔など捧讀してますます其信念を固められた。

第三の人は、矢張羽村の青年で、初め郵便局に勤務して、余か著書なる信仰の餘瀝を讀み、實に至極眞摯の心を起し、職務の上に安んぜざる所ありて、辭職せんとしては兩親の心配を想ひ、種々思考するも安堵の方法を得ず、此局長は至極親切の人なりしが、其親切を見ては、却て邪推して苦悶を增し、他の胸中を狐疑忖度し、善意を惡意に見做し、煩悶の餘遂に遺言狀を殘し置きて、最後の決心をなし、途に余か演說を聞きに來られた、そこて夫程眞面目なる心を起さしめたふ廣大の佛陀在すに、何とて心淋しくも最後の決心などをなすべきや、と佛陀無限の大悲を共に喜びしに、從來の苦悶一時に頓に消えて、如來の御力がありありとあらはれて、力强き信仰に入られた、其後此人は偉大なる御佛の護念を蒙りて、奇禍を免れた、不可思議なる事實がある。

期く一村に漸次三人の妙好人を得た、其人々は皆如來大悲の矜哀攝受に由り、不思議の救濟を得て、光明の人世を造り出した、明法房の歌に『山は山道は昔にかわらねどかわり果たる我心かな』佛陀の慈愛に浴せば憎惡怨恨の娑婆も、和氣藹々の光明土と化し、一如平等の和合海に入り、其幸福を享くるやうになる、祖師聖人の化土卷の中にも、日月星辰皆如來大悲の御惠みに入る人を護持養育すると說いてある。偖て此の涅槃の靈境法身の世界より、報身の御慈悲も顯現し、化身の釋迦如來も、親鸞聖人も御出世に相成次第である而して吾々も極樂に參れば亦此世界に還來するが夫てある、即ち五門を說てある、一には近門、二には大會衆門、三には宅門、四には屋門、五には園林游戲地門なり、近門は信仰を得れば佛に近づきつゝあるの門、大會衆門は多數同信のものゝ聚合し給ふところ、宅門とは故郷へ歸るの意、即ち命終りて極樂に往生すること、屋門は一家團欒の快樂を得る如く、極樂にて法味を受くるの意、園林遊戲地門とは已に極樂へ參れば、煩惱の林に遊び生死の園に遊戲することである。前四門は入門、後一門は出門である。此出門より還相回向の利益を得て、濟度衆生の爲めには涅槃の彼岸よりわざ〳〵此娑婆世界に還り、善巧方便を以て群萌を引入するとある、入は往相、出は還相

の利益を得ることゝなる、此土をして光明の世界たらしむるも此還相の利益あればなり、親鸞上人も、聖德太子や、法然上人の本地を指して、觀音菩薩、大勢至菩薩の現化と敬ひ給ふ、我此二菩薩の引導に由りて衆生を攝化するのみとの給ふ、親鸞聖人の理想は聖德太子てある、聖人の身は出家てあり乍ら在家同前の有樣となられしも、太子の佛法を模範とせらたのてある、即ち佛陀慈愛の中に逍遙して、人生の上に如來の光明があらはれ來るのてある。和讃に曰く『超世の悲願きゝしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ』

本號の求道欄は過般近角神戸へ出張の節同地の佛敎青年會にて講演せるものにて同地の山本陸次氏が非常の熱誠より筆記し給はりたるもの、而して同氏は數回に分ちて雜誌『羅光』に掲載の筈なりしが本誌の發行期日切迫して旅中の近角には新に起稿の暇なく餘儀なく我に本欄に拜借致たるものに有之、同氏の勞は實に感謝に耐えざる所に候。猶ほ稿料を取急き候爲め種々の行違を生じたる段は同氏に對し誠に申譯なく候也

一心一向に彌陀一佛に歸命する衆生をば、いかにつみふかくとも、佛の大慈大悲をもてすくはんとちかひたまひて、大光明をはなちて、その光明のうちにおさめとりましますゆへに、このこゝろを經には光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とときたまへり。されば五道六道といへる惡趣にすてにおもむくべき道を彌陀如來の願力の不思議としてこれをふさぎたまふなり。このいはれをまた經には橫截五惡趣惡趣自然閉ととかれたり。かるがゆへに如來の誓願を信じて一念の疑心なきときは、いかに地獄へおちんとおもふとも彌陀如來の攝取の光明におさめとられまいらせたらん身はわがはからひにて地獄へもおちずして、極樂にまいるべき身なるがゆへなり

（蓮如上人御文）

講演

人生と信仰

（信州に於て）

近角常觀

諸君、私は御當地に大層御縁が御座りまして、五年間毎夏參りまして修養會に臨みます。今日は御當地の同窓會に於て、一場の話をせよとの御招きに預りまして、御縁の深き地の同窓會に臨むとは、殊に光榮と致します。昨年一週間講じました「人生と信仰」に就て、話をせよと課題を與へられましたれば、注文の如く其要領を述べませう。昨年の講話は、「求道」の秋季號として、印刷しましたが、全國の求道者に歡迎せられ、忽ちにして盡しました有樣です、講義は拙いまのてありましたが、筆記せられた人が完うせられたからであります。本日は、其の要領を御話致し、一方には御地方には人生の問題に就て深く味へる人が多く居られますし、一方には苦める人は道を求めて將に光に達せむとして居られます方も多きことと認めます。今現に控所にある間に、適切なる問題を提げて解決を求められた人がありました。問題が適切てありますから、始め考つゝありし諸君に趣味のある樣に思へる以上に、諸君の實際問題の解決を與くる樣に、御話致すことを餘儀なくせられました。

問題を簡潔に述べませう。現今日本一般の思想界を見れば、先づ二つの思想があります。一は積極的、一は消極的、一は進取的、一は退嬰的、又一は正、一は不正、とも云はれませうし、又一は柔と云へば、一は剛と云はれませう。是は假に一を奮鬪主義、一を理想主義と名づけませう。奮鬪主義は今日の新聞雜誌は大底皆之れを主張して居りまするもので、他くまで奮鬪し、諸の部門に勵み、利の爲に、怠らず人の先とならむとするものてあります。個人問題に就て申しますれば、實業家は自分の富の爲に計り、競爭場裡に利を占めむとする思想を根底として居ります。誰でも此思想を持て居ますが、殊に近來は一攫千金を獲、あくまて自分が大なる富を致さむとし、露骨に云へば優勝劣敗、人を突き倒してもよいと云ふ有樣が一般てあります。各個人は皆此如き有樣てあります。其れてありますから利を得たる側はよろしいが、一方に利を得ば一方に失へる者ありまして、希望を失ひ落膽して居ります。併古人の所謂凡事悖而入者悖出、財悖而入者悖出と云へる如く、今日暴富を得たるものは、明日落魄して失望の谷に落つ。諸君が眼前に見る實業の實例てあります、表面を裝はむ爲に多少の制裁、制限を附けまするけれども、結局自己實現主義、優勝劣敗主義てあります。されどこれが爲に滿足を得ることは出來ず、これが爲に人々相爭ひ、相陷し、相嫉み、苦む有樣てあります。實業界のみならず、凡ての社會が、此の有樣てあります、世間はかゝることを進取的、積極的、又柔に對し剛と云ひます、さう云ふて宜ければ云ふて宜ろしい。

又一方にては、宗教を聞き教育を受け精神的傾向を有する

人々は、此の如くは考へず、一方にはかゝる思想もありますれども、世の中は其れては行かぬ。世の中は利己を主張しては行かぬ、同情をし、相助け、平和を來さなければ行かぬと考へる、是れも一種の奮鬪主義てありますけれども、自己實現に對し理想實主義と申しましよう。利を主とせず、友に和き、利己よりも眞に一家を和げたい、友と眞に睦みたいと考へます。それて自らこれを行ひます。又行ひ得たりと始めは考へます。然るに人は行はない、そこて理想の如くならない、一家が理想の如くならない、社會が理想の如くならない、世間が自分の理想より遠ざかる、多くの人はそこて自分の理想の爲に苦み惱みます。正しき理を得て居ると考へまするから、自ら正しと考へます。前者は利己實現せむと苦み、これは利己を殺すことを苦むのてあります。宗教教育の感化の行屆ける地方程、此思想が多くあります。感化のない處ならば利己實現は本來易きかも知れませぬ。宗教教育等が盛てあると、これが爲に苦みます。かゝる方面に心を傾ける人の氣付く如く、今日の社會は理想主義が甚だ行はれて居ります。即ち社會主義は一種の理想主義てあります。現時の如き社會、現時の如き男女問題を不可として、これを解決せむとするものてあります。而して又これが爲に苦んて居ります、自らは正し、善しと考へますれども、他人よりはさうは思ひませぬ。

巳上奮鬪主義、理想主義の二派は、大く云へばいくらでも大くなる、小にしては個人の道德問題を始め、一家の關係、國際の問題、世界の思想界の問題も凡てこれてあります。現今十九世紀の思想界に就て申しますれば、異なれる人が二人あります。一はニーッチエてあります。彼れは世界は力ある、力强きものは勝ち、力弱きものは敗る、故に吾人は力を强むべし。力を弱むるものは宗教、道德てある。宗教道德は力弱きもの囈語てある。力を以て勝ちさへすればよいのてあると、大膽なに放言てあります。されど此の如きニーッチエの未路はどうかと云ふと、安心も出來ず、著書も澤山ありますが、發促して死にました。私は西洋にてニーッチエの家を訪問して親しく其蹟を見ました。

ニーッチエに正反對なるものはトルストイてあります。トルストイは世人が爭つたり、惡事を爲したりするのは、一方が惡くなくても、一方はこれは應ずるからてある。一方が惡しくなくするとも自分はこれに應ぜず、奪へば與へ、惡をなすとも敵せず、恨に報ゆるに仇を以てせず、上衣を取れば胴衣をも與へよと云ふのてあります。

ニーッチエの說は說てあつてこれを崇拜して信仰として成立つものはありませぬが、此の如き思想は崇拜せずとも人間が本來持つて居るのてあります。トルストイの云ふ如く行ふ事が出來るかと申しまするに、出來ませぬ。事實あり、得ないことを二人が知つて居るのてあります。力が强きものが勝つと云ひますれども、同じ程度の人間が同じ樣に寄りて、一つものを奪はうとしても互に出來ませぬ。トルストイの云ふ如く與へるとも出來ませぬ。これを個人の問題に致しますれは、吾人は種々の境遇より感化を受けます、吾人が苦むのは名譽や利益を得たいとの考が根底となつて居る故てあります。ニーッチエの云ふ處はよく現はして居ります。然しかくの如くな

さうとするも、世間の義理があります、良心があります、敎があります、此敎と欲との間に挾まりて、人間は苦んで居ります。私は中等敎育を受けて矛盾を感じました、人に劣らぬ樣に勉强せよと戒めらるゝに反し、一方では又人に讓らねばならぬと敎へられました。國家間にても其力を蓄へて相對するのは個人間の競爭をして居る樣なものであります、それてありますから、一方が理想的にしやうとしても出來ませぬ。人間はかやうにして苦んて居るのであります、現に此問題の爲に苦んて居る人は今日世上少からぬと思ひます そこて此二者の間に安んじたる解決があるかと云ふことを述べやうと思ひます。小學生徒か綱引をする樣に、人生は引合ひをして居ります、而して兩方共苦んて向ふが讓らば此方も讓らうと皆思つて居りますれど、かやうなことは出來ませぬ、苦しいと知りつゝもやらねばならぬと思ふ、理想主義の人は互に隔て合ふことはよくないと思ひますが、向ふがよくすれば此方もよくしやうと思ひますも、向ふがよくせぬ故此方もよくせぬとなつて來ます。

今日は諸君の平生御研究なさる日本歷史に此例を取りましたら殊に適切でありませう。日本歷史の上にかやうに苦んて居る時代はなきかと云ふに、此の如き人生問題に苦んて居る時代は、源平時代てあります、源平時代に平重盛は理想主義に苦しみました。重盛は理想的の人てあります、忠ならんと欲すれは孝ならず、孝ならんと欲すれば、忠ならずとは、理想に苦んだのてあります。重盛の心事を察すれば其苦みの無理ならぬとを知るのてあります。重盛の理想は高くありました、故に今に至る迄倫理上の模範として引くのてあります。然し乍ら自ら安んじて身を待つて行けたかと云ひまするに、彼は苦んだ人てあります。朝廷に對して盡す能はず、朝廷に盡さんとすれは家庭にたつ能はず、遂に熊野に死を祈るに至りました。今日の青年の苦む處は高き理想の爲のみてはありますまいか、兎に角義理を全うし身を立てやうと、彼に對し、此に對し、理想の爲に苦んて居るのであります。維新の老人達は、今日の青年は薄弱てあると云ひまするも、老人達は奮鬪主義てあります。即ち重盛に對し淸盛と見れは分る、淸盛は嚴島をを作り、榮華を盡し、奮鬪主義利己主義を極めました。然し彼は滿足したかと云ふにそれて滿足せず、自ら立場を失ひ、遂に煩悶して死にました。

源平時代には多くの現代に比すべきものを、求められます。平家一門の柔弱なるとは、當時の文學等を以て知られます。皆人生問題に苦んて居つたからてあります。此問題の安心を得るには、人生は互に五分五分てあるが、五分五分て爭て居ては行かぬ。極端に申しますれは自ら道德を行ひ淸くなさんとして苦む場合に至りましても、動機は何れにありましても五分五分の人間にては到底滿足を得ることが出來ませぬ。如何にして安んずるかと云ふことを、自分の經驗上簡單に申しませう。自ら理想を行はうとするも出來ないが、反對に人が自分に此の如く理想的にして呉れたら何うてありませう。我に同情し我を惠み、此方の恨に、敵せぬものがあつたならば如何てせう。若しかやうなことがあつたならば、恨を向けて止まぬ惡人にても、其人に對してはかゝる心は消えて了うてせう。

此の如きものがなき以上は、人生五分五分の爭は止みませぬ。世界凡べて自分に恨み迫害をしても、かやうな大なる惠があうたなら、人世は眞に安んぜられませう。かやうな友は多きを要しませぬ。唯の一人て宜しい。我々は强き者に敗られた時は、眞の同情者を求めます。弱き者を抑へたる時も、人世は弱い者を苦しめておいて、これてよいのてあるかと、氣が附くのてある。

熊谷直實は、一の谷に年若き敦盛の首を斬りてより、菩提心を起した。同じ時代にても、平重衡は同じく一の谷の戰に源氏の爲に捕へられ、鎌倉に送られて殺されむとしたる時、必らずしも死を恐れるのてはなかつたが、內心の問題に苦を生じた。自分は嚴島、屋島、壇の浦、須磨、一の谷を訪ふて當年の有樣を回顧しました。此の時代は人生問題に苦しめる時代てあります。然るに源平の戰が盛なる時、京都にては東山に法然上人は念佛を說き、此絕對の大慈悲者同情者を示された。而して親鸞上人は現はれて此偉大なる佛を、絕對に信ぜられた。强きものに敗られても苦み、弱きものを敗りても、安心が出來ません。重衡の苦める、直實の發心せるてれてあります。人世已上の絕對の惠みと云ふものがなくては安心することが出來ません。直實も法然上人の門に走りて弟子となり、重衡も法然上人に法を聽きて安心しました。其往復の書面は、今に百萬遍智恩院にあります。

偖トルストイの云ふのは、吾々に神の意志を行へといふ。トルストイの言ふ處はすろしいけれども、今の階級あり、變化ある社會にては、人間に神の意志を行へと云ふが如きは、不可能のことてあります。寧ろ大なる惠みが、吾人に被つて居るに氣附くと同時に、大安心が出來ます。私自身の安心は此から來ました。人が互に苦んて居るのは、五分五分に爭つて居る故てあります。此絕對の大なる惠みを、見出したのは、數學の式て申しますると、有限數の上に、無限數が加はるのてあります。物理學て兩管に水のある時、兩管を通ずれば平均します。別に其一か、無限に涌き出づる源泉てあつたならば、他の管の水も高く上りて共に無限に滿足を來す。其如く人か佛に通すれば人は無限に滿足して各個人の問題となるのてあります。トルストイの云ふ如く、直に一個人に無限に行へと云ふは無理な注文てあります。

法然上人は念佛を稱へ、親鸞上人は佛の慈悲を御說きなされた。惠みの親のことを、南無阿彌陀佛と云はれたのてあります。重衡も直實も法然上人の敎によりて安心しました。猶詳しく人生問題に就て申しますれば、名譽の爲てあるとか、自己の爲とか、義理の爲とか、或はせねばならぬとか云ふて苦んて居りまするに、善にせよ、惡にせよ、積極的にせよ、消極的にせよ、皆自分の力ては出來ない、出來ないものが偉大なるものに向て、眞の親の惠みこそ、偉大てあると氣が附いた時、人世に向ひますれば、今迄此偉大なる惠を知らぬ故にかやうに苦み、かうやに恨て居るのてあると相爭ふはつまらぬことに苦むのてあるとなれば、放して了うことが出來る。道德の爲である、社會の爲てあると云ふて居る間は止められぬ。一家、一個人の間に相爭ふのも、根底のないことてあります。あの人がかう云ふた故に、かうせねばならぬと云ふ樣なこと

は、つまらぬことであります。人生は此點に氣附かば、手易く解決が出來ます。トルストイの云ふ處は、自らの力にて神の意志を行へといふ、夫よりは寧ろ偉大の力に氣附かば自然に爭はぬ樣になる暖簾と腕押の如く、一方が應ぜぬ故に、爭が成立せぬのである。

此問題を詳しく云へば、人が身を持ちくづし、一家が面白くなく暗落して、他人に惡感化を及ぼす樣になる。若し人が此の偉大なるものに氣附くと、中心に滿足を得る故に俄に變化する。又人ありて自分は善くして居るのであるけれども、人が兎角善くないのであると云ふて居る人も、此の偉大のものに向へば我ばかりよいといふ樣な心は止みます、偉大なものに向へば、自己が足らぬからであります、これが分らぬから、自分がよきものとなるのであります。これが分りますれば、自分も惡いと云ふことが分ります、自分が完全ならぬものであることも分ります。抑々自分は善い、たとひ向ふが惡くするとも、自分は善くしやうと思ふ考は、自分の價値を知ることによりて止みます。最もよき人にても、自分は出來ると思ふて居る間は、自分の出來ぬことをも考へ附き、遂に苦しむ樣になります。其樣なことが出來ぬと分かりて、安んずるのである。自分も此理が分らぬ間は惡いことをもしたでないかと氣がついて、人が自分に向つて惡しくして來ても無理でないと感じ、五分五分で相爭ふ腹はなくなるのであります。絶對の源を受けて、管を一方に導けば、他の管も一杯の水となります。此の絶對の源を自覺したのは、鎌倉時代であります、故に鎌倉時代は自覺の時代でありました、親鸞上人の信仰、禪の直覺的自覺、日蓮宗等此時代に起りました。皆此偉大なる力に、氣附いたのであります。

最後に一言諸君が誤解せぬ樣に注意します。かく言へばとて信仰は、世を捨てよと云ふのではありませぬ。小なる人間の間の五分五分の爭の處へ、絶對の力が加はるのであります。無限は數字で十も一も同一價値であります。如く大なる力のあるものは、大人小人との綱引の如く引くことも、讓ることも出來るのであります、信仰は必らずしも讓るに限りませぬ引込むに限りませぬ、これは正し、これはよさねばならぬとなれば、千萬人と雖も我行かむと云ふ信となるのであります、鎌倉時代に時宗が斷じて爲したのは、日本の體面の爲にせなければならぬと信じ、元の使を斬り、軍を起したので、大なる結果を來したのであります。小道德、小義理には讓りますれども自ら行はねばならぬとなれば斷じて行ふ、鎌倉以後の人々楠公等に著しく自覺の光が現はれました。諸君も結局此鎌倉自覺時代の信仰を得て、此の大なる力によりて働きて頂きたいと思ふのであります、之が即ち人生に於ける信仰の力であります。

告白

入信の前後の回想

小澤　一

左の拙く、大まかな回想の一編を告白とし、謹んで捧げ申しまする。空なる文字に貴き紙面を汚し、御耳を煩はし奉るの罪、深く御詫び申しまする。

○

既に九四年目の、其の折も近き去りぬる、三十六年十月三十一日のことなりき、母校の控所に、敎念會と云ふ會を催す佛敎講演會、大講堂に開かるとの掲示を見ぬ、心に惱み求めける吾は課業を休みて出席せり。講師は村上先生と近角先生とにて何れも初めて拜顏する方々なり、熱心に拜聽せしめられて講話の終るを惜しく感じけるが、當夜月花園に信仰談話會ありて、近角先生出席せらると聞き、喜びて吾も其の末席に列りたり。

吾は年寄り給へる兩親が中の一人子にて、父母の限り無き慈愛に余所目には何の苦も無き仕合せ者と思ひなされ、また爾あるべき身ながら、幼きより、心に人知れぬ淋しさを感じぬ。十六才の春、やつとの事許され、山間なる鄕に、父母が膝下を辭して上京し、中學へ入れるまでの身の上、濟まぬ事なれど心の中には逆運兒と思はざるを得ぬ身なりき。生來情的な神經質な身は稍生長せる頃より、世間の哀れな者に心附かれて、旅は道連れ、世は情てふ言葉嬉く、云ひ知らぬ味と力强さを感じ、この心の上の滿足のみに獨り心强う思ひ來りぬ。中學卒業前より、生來身の虛弱なること、殊には神經衰弱てふ忌まはしき病に頭腦も惡くなりたる事など深く惱み來りぬ。德を修めんとして遂に苦しみに陷れる余は此の夏、望絶えんとして、此に苦惱益々深く、希望の光だに無く、哀れなる身の感慨日々につのりぬ。搗てゝ己が心を修めんとするにつれ、友人、深交の中いよ〳〵吾が身の缺點多きに氣附き、せめては人として恥ぢざる如き道德的なる生涯を送らん事、己が天職を求めて是を全ふすべき事を希ひ、加ふるに昨年初秋よりの神經衰弱症重りて、同居せる友人の吾を導き給へる中に、憂愁の身は是等の友の優れたるがいよ〳〵分り、而も其の快活なるに伍し得ぬ罪を如何にも苦痛に感じ、今や苦惱殆んど堪へ得ぬ計りとなりぬ。

此の夜近角師のあたりに集へる、一座三十餘名の求法の席末に、斯る憂悶の胸を抱ける吾は今も悄然と、而も今宵は胸底何かの力を感じて侍しぬ。會員相互の談話の中に、師は實驗的信仰の懇ろなる法話を最も熱心に說き給はりたり。吾は是迄て宗敎の何なるものなるをも知らず、唯此の頃吾が願ふ修德は宗敎の力に依らざるべからずと思ひしのみ、宗敎には全く緣なかりし身なり。然るに今日始めての法話に、殊には先生の熱誠溢るゝ力の奧に吾が如きものも慰藉せらるゝものある樣感じ、此の力の何なるかは未だ知り得ざれど、先づ勇氣を得ぬ、去れば親しく師の敎を仰き度き願にて吾が苦悶

の一端を述べたり。先生は此の慚づべき苦悶の告白に深厚なる御憐憫をかけ給はり、夜既に後そければ詳く說き得ざるは殘念なれどとて、御自身も曾て非常なる苦悶を經られし事を語られ、切々たる慈言を結ぶに「煩悶を極めた處に無限に自分を愛する友人、此の友は自分が爲したる如くなる罪過にも、自分に對して嫌惡の心無く自分を愛する友たる佛あり、去れば如何なる人も必ず限り無き安慰を得べし、心強く信の一路を求めよ」との慈愛深き法話を以てせられ、且つ高著『信仰の餘瀝』を讀めと敎へ給ふ。師の御言葉終るや、時既に至りたれば散會せらる。時に委員の方二名代る〳〵吾が前に來り給ひて慰藉し給へる切なる御同情身に泌みて嬉しかりき。

歸途夜は後そかりき、商家の店頭皆戸ざさる、途は日々の通學の而も斷間無き苦惱の思ひに心常に鎖され、眼は恰も役馬が目蔽はれし如く、何處に何があるやら知らで、唯機械的に往復せる苦惱の途、今夜は畫よりも明るく不思議の心地せり。師の宣へる御佛、未だこれと分らざれども久き間、絶えて無かりし愉快を覺えぬ、愁眉を知らず開けば、高き秋の空に澄める星光、今宵は悲愁の色とは見へて、人無き途を獨り歩みぬ。遊子が身の何くれと無く、厚き世話爲し給ふて、親々にも劣り無きこと此に四年に及び、今も吾が身を托す寄寓の人々皆寢ね給ひ、友も寢ねぬ、疲れし身を机邊に下ろし、今日ありし事ども思ひめぐらしつゝ筆を行るに同室の、夜な〳〵寢られぬ吾に書讀み給へる友ふと目覺めていねよと勸め給ふ、やがて吾も床に就く、外には斷え〳〵なる蟲の音今宵も天地の悲哀を告ぐ、此日始めて我が胸底求道の心切ならしめられたり。

待ち遠ふかりし日曜日、雨を衝いて本郷なる求道學舍に初めて講話を拜聽し、次の日曜日も行く、斯くて彼の日以來、苦さの餘り求めざるを得て熱心に求めたれども、信仰未だ確と獲られざりき。

愚鈍なる吾が性一面に情的に亦知的なる傾、すでに此の頃より現はれしと見へ、殊には皮相、無智たる頭は何事をも知るに由無けれど、己が研究せんとする哲學てふ知的追求と信仰との關係を慮りて、先づ理論的たる信仰を得んと希ひたり、此の傾は獲信障礙を爲せる事至大なるが、また後にして思へば可笑さの極みなり、斯る間に此の方面の書にも思ひを灑がんとせり。然るに十一月二十五日彼の會の信仰談話會の二度目に出席したる時、近角先生、信仰は理論に依りて得べきものならず、內心の實驗に依りて獲るものたることを說かれ、幷に信仰に依りて生じたる奇蹟の實例を擧げらる、依りて始めて、信仰の理論に依りて得べきものならざる事を知らしめられたり。去れど當時の誤れる、非自覺的、抽象的なる理知的傾向に煩はされて實驗てふ不可思議なる事實を直接、必定に聞き得て信仰は感情（其が主人格、信仰てふ事實の有機的生命的關係ある成分なる事の關係を忘れ、事實に依りて獲、實驗し得るものと、また佛を非人格的に考へ、此の力が宇宙に存する事を信じ得たる事是信仰なり、吾信仰の緒につけりと考へたり、語を換へて云へば、信仰は不可思議大悲慈父母の加威力に依りて得せしめらるゝ絶大の事實なる事（是を理知的に即ち主觀的一面より見れば主人格的事實たる事）即

ち絶對他力なることを知らざりしなり。されど一度法話を聽きし以來、やる瀨無き身も力得られん望得て此の望に生きたり。斯くする內に惱みの此の年も暮れんとし、上の如き苦惱を生ぜる源たり、生命たりし生活は益々苦惱となり行く內に、變らざる苦惱の年を迎へたり。幼き時より認め出て六年にして全き心とかゞやける光に何時とは無く揭げ出てしめらし修德の理想、體現せんとあがけばあがく程其頃、潛める否氣附かざりし黑惡、益々出でゝ遂にはありと見し心の麗さも消え、今や吾が本性は全く暗黑、罪汚の哀なる身なるに氣附きたり。斯る中に吾が修德、努力の唯一の賴みとせる良心、主義も吾が惡行缺點に苛酷なる呵責を加ふるのみ、頻りに苦められて而も是が爲めに我が缺點を取り去ること毫も能はず、吾は良心の指揮と自己の心掛け、力行のみにては、到底吾が缺點を取り去る事能はず、良心も終に賴む能はず、去れば今や大なる力に賴るの外生くるの途無き事を眞實、根底より感じたり。斯くて我が心の內、外、到る處暗黑極まりて、して見やう無き時、是まで苦さの餘り求め力めざるを得て來りし信仰、暗黑、惱の胸中に無限の慈光と頂け、感謝の情溢れ、觀喜の涙流れて吾が世の常暗、不意に明け、苦惱脫落して生れて始めて心身柔軟ならしめられし事、唯不思議の事なりき。斯くする中、二月二日、求道會に「佛陀は光明なり、壽命なり。」てふ近角先生の法話を拜聽するに及びて此の實驗の信仰泌み〳〵と頂け湧躍歡喜せり。

人生上には如何ともして見やう無き苦惱極まれる身を心の底より、慈み賜へる洪大無邊の慈光を蒙むりながらも、刻下に事急に、病も慢性となり、日々に悶えざるを得ざる爲め、勿體無き限りなれど苦悶の黑雲猶、霽るゝ事仲々に難く身體の疲勞も甚しく果ては苦惱する事も出來ざる樣になりしが、やがて俄然一事全く破れし爲、即ち二月十五日病軀の蹉躓慘として一度鄕里の父母が膝下に走り、數日の後一人の病友と共に、熱海に靜養の身となりぬ。

此の蹉躓は今迄絶えざりし苦悶、中心の望斷えて絶望の淵に墮ち、苦衷は友と近き恩人との外解せられず、身は罪惡無常の感に殁せり。有難き哉、攝取の慈光やがて拜せしめらるゝを得て「信ずる外は別の仔細なく」理屈も何も無き信仰泌み〳〵と頂かれたり。當時殊に次ぎの和讃身一つに喜ばれぬ。

大聖おのゝもろともに、　凡愚底下のつみひとを、
逆惡もらさぬ誓願に、　方便引入せしめけり。

限り無き罪、如何にもして見やう無く濟ぬ極みなり、偏に大悲の佛陀を仰ぎ、身にあまる悅びを得せしめられたり。

云はん事厭はし、此度療養の中また吾が心に一層の苦痛を負はしめし事出でたるが、翌月十三日よりは母上老躰ながらに上京し賜ひて、今の處に寓居する事となりたり。

唯一縷の信を生命と賴る、敗餘の身、此に居を移せるまで其間四十日、心の安き事一時も無く、連日斷腸の思に泣けり、轉居の初三日苦痛最も甚しかりき、此の間友と恩人とが寄せ賜へる同情と慰藉、永く忘る能はず、而して底下の下根が哀なる苦痛の生活唯此にのみ永の意義ならしめらるべき大悲の善巧、其廣慈に遍らさせ給はて、吾が信念日々に進めしめら

れ信樂せしめられしことこそ唯一、無限の慶事なれ、人生何處として立場無く苦惱の淵に沈淪せる時、心一轉して、佛陀の慈懷に在るの自覺を思ひ起す毎に、暗憺たる胸中、慈光の慈みに滿る涙、滂沱として流れ、感謝の情に心身の苦惱癒え、其の快言ふべからず、歡喜踴躍して、安慰の境自ら現じ、不捨の慈光に、寄せ來る苦惱、雲と消えて、弱きながらも向上の勇氣自ら湧くなり、而して一苦、一惱益々信心の固めらるゝを覺えたり。

去れど一年餘の病は熱海の轉地にも、さしたる効果無く、歸京後はまたも重りぬ。最も苦しき時は藥用せては一睡も成らず、頭腦亂れ心身疲勞の極に達し、神經極めて鋭く、感情さらぬだにつのりて一事一物皆惱み苦痛の種ならざる事は無く我ながら堪へ難かりき。恐しき痛は此の後も永く續きたり、而も難治の重患も信仰に得せしめらるゝ安慰にて自と癒され、大小慈父母の惠に病軀健かならしめらるゝの力、我知らず蒙らしめられつゝありたり。

以上はさゝやかなる吾が信仰生活の重に情感の時期にして、入信の時なりき。然るに吾が心情生活は五月の頃より次第に、始めは無意識に變化を來しぬ、失意無常、我利の世態加ふるに病苦等幾多世の斷え間無き風浪の打擊に一時は心情無く破壞せられ、果ては苦痛なる境遇の裡冷靜の傾生じ、信念より得しめらるゝ歡喜の情も次第に減じ來りぬ。斯くて荒蕪の理智のみ働き吾が生活は荒凉の其れと化し、根底の信仰は未だ曾て動きし事無かりしも、理知的傾向、一時は其極に達し一現、一象の底をも侵さゞる無く懷疑の鬼となりて苦痛正に其が頂に達しぬ。斯る苦痛は暫くにして打ち勝ち得、やがて病氣の癒ゆると共に心情も恢復し　また大悲の洪大なる御慈悲に人生慈光の境と頂け日々の日暮しにも自と勇氣得られたり。斯る專ら理知の働ける時期やがて知識的に見れば絶對他力信仰の全人格（即ち信仰、情、意、幷に知等）の意識的調和の解決は達する前の時期は越えて三十九年の始に及び此の武ヶ年の間は慚愧、唱名の日暮しのみ多く、道を求むる事は終に忘り得ざりしも信樂せらゝ事うとかりき、懈慢の生活實に慚愧に堪えず、濟ぬ極みなり。信仰の修養と共に感情、思想上の苦鬪、實際生活としてまた人生問題としての思想問題すなはち信仰は知識を要せず、また知識は信仰に達し得ざるは知れるも、信仰に對する知的生命の承認、滿足の立證即ち信仰の知的、やがて全人格の反省的、意識的滿足の講究及び御佛の子として慈懷の內、此の現實の世界に望みなきながらも吾が分を盡さしめられ度しと希ふさゝやかなる苦心とに哀れに慚かしき吾が生活中いさゝか寢食を忘れ、心身を碎き、情知の慘をなめき。

此の時期の始より吾は思ひき、吾等人間のまた人生の最も否、絶大に貴くして唯一の生命たるものは實に信仰にして其はまた毫も知識、學問を要とせざるも、然し吾等、一度信を獲しめられなば翻りて人生(現世)其のものをも生さしめらるべくまた益々多く生かさしめられざるべからず、去れば獲信の人また己が有緣に依りては、人生の生ける事實、內容の一部たる調理、道德、哲學、文藝其他あらゆる文明やがて信仰的人生其者の可成內容豐富なる實驗者、批評家文明の開拓者た

らざるべからず、去ればまた信仰の人は其等問題の堂々たる研究者改革者解決者たらざるべからずと、斯く信し斯く要求し、渴仰して信內の吾がさゝやかなる探求生活は進みぬ。即ち此間一貫せる問題を別の言葉もて表はせば、信仰內に個人格即ち絶對他力信仰の全人格の生活やがて人生其のものゝ統一幷に調和的(最も廣義の)即ち道德的(廣義の)全內容的活動即ち人間的、進化的一面を意識的に存せしめ、また是にも重き價値、意義を措くを得せしめられ、發展せしめんずるやがて全き宗敎的要求の意識、意味滿足を絶大的信仰の裡に探求し得せしめられん事なり、換言すれば絶對他力大悲の一元の裡に、相對的一元が攝取せられて以て理想的現實の一元（宗敎的人生）となりてなせしめられんと希ふ事、約言すれば、人生に對する窮極の理想即ち宗敎的人生の理想、やがて信樂中の、全き人生の宗敎理想化、一言に絶對他力信仰と人生其のもの、內容との意識的、調和を知らしめられん事なりしなり、(此の調和、斯る問題の事實的解決は實は絶對的信仰、其が實驗、意識內より自とまた意識的に得らゝゝもの、其が自と活現し出づるものなりしなり。)然るに此の時期の重なる、此信仰生活中の追求は此の期の間其が自然的なる解決に、即ち絶對他力信仰的、實驗的なる解決に達する事能はざりき。

如上の此の問題の要求、渴仰やがて絶對他力信仰的全人格の自然的、意識的、調和の解決が得られざりし所以即ち其が信仰の裡に實驗的、事實的に活現し來らざりし譯からを觀れば一言に絶對他力信仰が眞に頂けざりし一事にある事、實に慚愧の極みなり。尙ほ此の事實を詳言すれば、絶對他力の信仰より人生へ現はるゝ此の出て方の間違ひ即ち一面には入信後考餘り嚴肅なりし事やがて絶對罪惡觀無常觀が未だ眞實頂けざりし事即ち是等が一度根底より破れて大悲の絶對救濟に我が人生が根底より眞實捨られざりし事幷に是に沿ふて吾が研究法が誤り居たる事、即ち其が全人格てふ具體的統一を有せざりし事となり。此の最後の點は此に要なき故に是を省き他の點に就きて、少しくありし消息を顧みん。

前にも白せる如く、吾は入信後、一面極めて嚴肅なる考を持し、從つて其の始、人生の事物一切が直接信仰的ならざるべからずとの感を一面に有し、是が如上の愚鈍なる身の信仰生活上の過、(即ち絶對罪惡、無常の自覺、棄我やがて絶對他力大悲の實驗的信仰、信樂より自と人生へ現はれしめらるべきの途を誤つて得ざりし事、)の一根底となりしなり、而して此は未だ絶對他力の實驗的信仰が根底より味ひ得ざりしの故なりき。

辱なくも瀕死の吾、一度罪惡と無常とを自覺せしめられて、遇ひ難き大悲慈光の攝取を蒙らしめらるゝ不可思議の洪恩に浴し、大悲救濟の人生の最大事を得せしめられながら、彼の永き間信樂の生活得らるゝ事うとく、あまつさへ分りしと思ひ居たる、絶對罪惡の自覺未だ根底より頂けざりし事、御佛の休む時無き御慈みの御焦慮と師友の御導きに對し奉り慚愧、恐懼に堪へず、然るに大悲の絶大、極まり無き御惠は、懈慢の信仰生活に慈父母の切なる親心を知らて計らひのならん限りを盡せる不信心、極惡益々重なる身をも一度攝取しては捨て賜ふこと無く、導き賜ふ事、師友の鴻恩も知らしめられて

慚愧と感謝に堪えず、去れば懈慢の身、忘恩常沒の吾も逸し難き不可思議の御緣にもようされて常に御導きを蒙らしめ賜ふ。

氣附かざりし力味心の一縷に、また願に僞り安んじて絕對罪惡の覺悟即ち出離緣無しとの御警告眞に聞かれず、我、人生の根底、未だ斷ち切れず、絕對救濟の恩德未だ根底より頂けざりし罪業の吾も前の時期の終れる後また無智無力の自覺も眞底得せしめられし後漸く今度こそ罪惡や無常の思ひ碎けて出離の緣なしとの覺悟眞實出來せしめられたり。即ち人間人生の眞相、無底の暗黑を絕大の光明に照され、根底より此の絕對罪惡、無常の自覺出來、我全く捨らしめられて此に滿てる無限の慈光を心底頂かしめられ安んぜしめらるゝを得たり、噫此の絕對他力救濟の無限たる、恩德常に仰ぎ頂かしめられん、

「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫曠劫よりこのかたつねに沒し、つねに流轉して、出離の緣あることなき身としれば」

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこと、みなもてそらごと、たはごとまことある事なきにたゞ念佛のみぞまことにておはします」

我等が救はるゝは唯絕對大悲の御親のみ我等が生命は唯絕對他力回向の信心のみ、念佛のみ、

「彌陀の五刼思惟の願を、よく〳〵案ずればひとへに親鸞一人が爲めなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願の、かたぢけなさよ」

吾は善きも惡しきも何もかも佛に任せ奉ると云ふ事より外途無きなり、

彌陀智願の廣海に、　凡夫善惡の心水も、
歸入しぬればすなはちに、大悲心とぞ轉ずなる。
大願海の中には　智愚の波こそなかりけれ、
弘誓の船に乘りぬれば　大悲の風に任せたり。

噫法音常に拜誦せしめらるべし。

相對的なる人生を土臺としては、人智の計ひを以てしては、決して人間、人生の眞自覺は得べからず、眞相知るべからず、信仰上の事につきては眞無智なり、眞愚ならざるべからず、須く唯絕對の光明を仰がしめらるべし。人間眞自覺を得て根底より捨らざれば、人生一度根底より破壞されざれば、絕對光明理想海には出で得べからず、然らざれば人生遂に生きざるなり、即ち根底的に罪惡、無常、虛假、無識、一點の余裕も無き我、絕對救濟の大悲に捨りて、人生一度根底より破壞され絕對大悲の光明に攝取せらるゝの時、救濟の恩德蒙らしめられ人生始めて生かさしめらるゝなり、我が身全く大悲に任せ得せしめられて人生到る處に惠み活現し溢る即ち人生至極のまた末通りたる歡喜あり溫情あり力あり望ありて生き甲斐、働き甲斐あらしめらる、また師、弟、父母、兄弟、夫婦、朋友皆末通りたる緣あらしめらる、人生、佛陀の御惠の此の心にも身にも餘る悅びだにあらば他に何ものも得られずとも可なり、此身如何に成り行かんとも恐れざるなり、而して此の自身と信樂と一切が絕對他力なり、本願の不可思議なり、絕對他力

廻向の念佛なり。

絕對他力救濟の信仰に於て大悲に得せしめらるゝ絕對罪惡てふ眞自覺の一點極めて肝要なり。此の自覺、慚愧は直に其の裡に大悲の慈光頂かれ感謝と一體なり。而して一切の信仰生活は此の絕對罪惡の自覺やがて慚愧と感謝即ち我の全く捨たれる境より自と活現す、即ち此の境ぞ絕對他力の信仰より人生へ出づるの處なり。即ち此の境は我の全く捨たれる絕對境、無我の境にして絕對他力大悲より自から人生、相對界に出で、己ならしめられて人生の事、我等の爲す事凡て、即ち道德、倫理哲學藝術其他一切の學術も信仰生活にならしめられ、生かさしめらる即ち價値なり、意義なり、改發發展せられ乃至觸光蒙るなり。而して此の人生の事實の現はるゝや絕對なる實驗的信仰の儘なるべくして我が計ひを加ふべからず、且つや信仰生活の根底、最も肝要なる點は絕對罪惡の自覺の一點の余裕無く唯佛と我との絕對境にして此の信、救濟やがて往生が人生の最も大切にしてまた最も力を入るべきところなる事、常に忘るべからず、而して此の根底より信仰の人生は自づと出づるなり。(此の信仰と人生との關係的事實に就きては尙ほ最後に少く述べしめられんとす。)

人間、人生は何處にも佛を慕ひ求めざるを得ざるなり、常に大悲の慈懷中に在らしめられてはなし得ざるなり、唯極愚愚鈍の吾躬して始めて、苦惱の時にのみ驚きて慈父母を呼び奉る、而も日々の事偏に無限大悲の切なる御方便、善巧なるを思ふ事おろそかなり、唯々實に慚愧に堪えず。然るを悅ばしき哉、不可思議なる哉、彌陀の誓願、彌陀の名號此の攝取不捨皆對他力極まり盡せる廻向のみぞ我、極惡、生死の凡愚が助けしめらるゝ唯一の御力なり。去れば底下の吾、罪惡無常の自覺と慚愧、感謝の念佛相續せしめられ、また根底一道の全く任せ奉るの安立ならしめられ、尙ほまた救濟せられ、往生せしめらるゝ事人生の最大事なるを知らしめらる實にや極み無き悅びあり、唯凡愚の計ひ慈光を障へ奉り、師、友の御敎化に反くを恐る。

歡異鈔の御しめしに、

わろからんにつけても、いよ〳〵願力をあふぎまいらせば、自然のことはりにて、柔和忍辱の心もいでくべし、すべてよろづの事につけて、往生にはかしこきおもひを具せずしてたゞほれ〳〵と、彌陀の御恩の深重なることをつねにおもひいだしまいらすべし。しかれば念佛もまうされさうろふ。これ自然なり、わがはからはざるを自然とまふすなり。これすなはち他力にてまします。

念佛唱へつゝ慚愧、感謝の生活を送らしめられなば其處に自と修養も成らしめられ已が仕事も爲さしめらるゝなるべしと頂かしめらる。

心身共にたすかる途無かりし身、堪へ得ざりし病も次第に遂には我知らぬ間に全く癒やされ、計り難き善巧蒙らしめられつゝ、常に怠惰にして哀れに云ひ甲斐無く濟ぬながらも今日あらしめられまだ今後もあらしめらるゝ事御佛に對し奉り、恩師始め諸の恩人に對し奉りて感謝に堪えず、また歡喜に堪えず、而して御法につながるゝ不思議の御緣數ならぬ身の全生涯の意義の焦點なり。

終りにさゝやかなる吾が信仰生活の思想的側面より見たる愚信やがて前に述べし思想問題に就きての愚見を極めて大まかに表はし御是正を賜はり、御教化を蒙る一つの便りとせん。

信仰は人間の自覺、人生の目覺を以て始まる、而して其はやがて一度人生の破壞たるべきなり、即ち自覺は宗祖の實驗てふ自然亦必然たる事實に對する信に依りて全たからしめられ、此に宗教的信仰の極致、絶大なるもの、絶對他力大悲の信仰是なり。

信仰即ち絶對他力的實驗的、亦一面人生的たる全事實、實在やがて眞理は自覺的(罪惡、無智の)、信仰的、實驗的なる亦理知的に即ち主觀的基礎の一面より云へば斯る全人格的なる眞理なり、而して此の信仰なる絶大的眞理の確實性の證明は絶對他力信仰、喜樂てふ絶大的事實の自證是なり、「自仰てふ絶大なる事實、眞理は自から知的意識(意味)を具有す即ち其が經驗を有し乃至(信仰なる眞理の實驗に就きて)反省的(即研究的)顯現、分化が可能なり。」

「絶對の信仰は批判の絶對的權威なり。」

絶對他力信仰の內容は絶大にして絶對他力大悲の慈父母と沒入的なるまた自からなる、攝取せられたる我(信仰的個人格)、人生、自然(是等は絶對他力信仰の根底たる自覺、救濟より出づる相對的一面の全體なり、而して全體を見ざるべからず。但し謂ふ心は絶對他力信仰の實驗的事實にして所謂本體論などには非らざる意なり。)即ち大自然やがて絶對他力的なる相對界是なり。(相對界は絶對他力大悲の實驗的信仰に於て沒入的また自からなる事實なり、即ち絶對的事實(觸光蒙るなり)また相對的事實なり、而して此の相對と絶對との關係は人間の計ひを加へ得る處にあらず、また其の間に分析、抽象の見を加ふる事を得ず。」「信仰が一面には極めて二元的(宗教の人間的なる理想即ち宗教的人生と絶對他力大悲の絶對眞實の光明、惠み及び宗教最後の理想境實在す)にして而も絶對的一元の理に相對的一元が攝取せられ乃至觸光せらるゝものたる理想的現實の一元が自とまた嚴然となせしめらるゝなり。

此の事實は是絶對的信仰に於ける人生の事實其のもの「人間、人生の統一的、調和的最も廣くまた自然的なる意味にして可成內容豊麗なるやがて信仰的全人格の全要求生活に關して意義價値ある乃至其が過程としての(事實活動、內容」)の存在并に價値の根據なり。

絶對他力大悲の信仰的生活即ち慚愧感謝の生活より人生の一切活動が生ずる處是信仰的生活なり。信仰生活やがて信仰が措くところの人生の事實の存在、價値及絶對救濟の本願に對し奉りての感恩、報謝の念より、やがて信仰的全人格、人生より自と人生の爲めてふ活動起る、而して此の活動は是人生の理想化即ち信仰的、人生的理想化なり。また人生の理想化とは信仰的、全人格の信仰的、調和(最も廣き意味にて)并に統一的また可成內容豊富なる即ち道德的(廣義の)生活やがて宗教的生活なり、即ち御恩報謝の生活なり、而して是人間、人生の至高、圓滿、絶大の意義なり、滿足なり。(絶對大悲慈父母の救濟、御惠が人生最後のまた唯一の意義なり、是に依

りて人生の調和的にして可成內容豊かなる即ち道德的たる一切事物皆意義と價値あらしめらる(信仰、信樂が根底にしてまた始終是に最も力を入れざるべからず。)

信仰的人生の事實の評價的判斷并に眞理の判斷如何と云ふに先づ其の價値判斷より見れば宗教的人生も價値の體系として見らる。此の價値の體系とは絶對他力、惠み、眞實救濟てふ絶對的價値と相對的事實の準絶對的(觸光せらるゝやがて信樂的)價値并に相對的價値なり、「此の價値の體系は價値の主度、高下明なり、即ち信仰生活の根底、信樂の最もまた絶大に貴きを知る」而して相對的事實の價値の標準は信仰的全人格の可成內容豊富に充實せる調和的(廣義の)滿足の生活是なり。次に眞理判斷より見れば宗教的人生も眞理の體系として見らる、また此の眞理の體系は無限なる功德及び眞理のまた不可思議なる絶對大悲てふ絶對的眞理と沒入的、攝取的なる相對的事實即ち相對的眞理の體系なり、而して相對的眞理の標準は信仰的全人格の(廣義の宗教的)經驗生活の可成內容豊富なる調和的體系を爲す事是なり。

學藝の意義と作用とは宗教的人生に貢獻する事即ち絶對他力信仰的なる人生、自然の意味を益々多く深く知りて以て其等を益々多く深く經驗し享受し發展する事是なり、詳言すれば學問卽ち理知的要求の人格上の意義并に其が人生に及ぼす反應及び研究の唯一の方法即ち事實、實在の根本的にしてまた自然的全體的なる考察やがて信仰的事實、自覺の知識的承認(宗教認識論)と是より轉じて宗教的事實の有する經驗的乃至反應的なる知的唯意識、意味を現はし以て全人格の反省的、意識的なる滿足をも得また宗教を全文明に承認せしめ宗教の全文明に對する有機的意義、關係を明かにし宗教的人生の內容を益々高め、豊麗ならしむる事是なり。

信仰は其の中堅、實驗てふ計ふべからざる、眞實、不可思議にして如實に認めざるべからざる事實なり。而して此の實驗とは絶對他力なる慈父母の御慈悲を衷心から蒙らしめらるゝ事實なり、信樂なり、救濟なり、信仰てふ絶對的事實の本質は其の一成分として知的意識を有す、此の事實に於て知識は一面、本來信仰と內的生命的關係を有す。信仰は事實なり、理知は事後的の事なり。知識、學問は信仰、宗教の生命、本質に對しては毫も力無きものなり、信仰は他力なり、

和讃に

金剛堅固の信心は、　　佛の相續より起る、
他力の方便なくしては、　　如何てか決定心を得ん。

嘆異鈔に

「他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖教は本願を信じ、念佛をまふさば佛になる、そのほかなにの學問かは往生の要なるべき、」

知的傾向やかて學問が獲信乃至信樂に一面障碍を爲す事は事實にしてまた信仰は學問を要とせざれど眞なる知的進行、學問は理知に先づつ事實、理知の眞の位置及び無智の一境を認めやがて信仰と合しまた信仰生活の中心、根底を人生に備へまた其を明にするが故に此に信仰の調和即ち絶對的信仰は學問が攝取せられまた活現、改整乃至觸光せしめらるゝに至る事を得べきならん、而して此は熟心、至誠、信仰的なる學術

生活に依りて必ず達するを得べくまた此に達して初めて學問の意義知り得べきならん。(如上の思想は絶對他力信仰やがて宗教的人生、自然の全體のまた自からなる事實また爾あるべき事實の意識的經驗乃至反省より成る云ひ表はしならんと思考す。)

要するに信仰、宗教上第一義にして他は第二義なり、(信仰上に第二義と謂ふ心は他に於て第一義と云ふよりも高き意義を認むるものならん。)

絶對他力大悲の佛に攝取せられたる人生に慚愧感謝の信仰生活即ち自然の裡に各々其の緣に從ひ、絶對他力の裡に爲すべき事を爲さしめられつゝ宗教的人生の理想を現さしめらるゝの生活を爲さしめられ命終の時宗教最高の理想境たる極樂淨土へ迎へらるゝなり

和讃に

信は願より生ずれば、　念佛成佛自然なり、
自然はすなはち報土なり、　證大涅槃疑はず。

而して一切は南無阿彌陀佛なる深き敬虔、歸依、信樂の裡に沒入するなり。

○

信仰のこと凡て恩師の御教化の鈍き胸にとゞめしめられしものゝみ、また細々〳〵ながら味はしめられしものなり、謹んで恐る極惡、愚鈍の身常に大悲の慈光を障へ師と友の御心にそむかん事を、而も一念常に師友の御教化御指導を仰がん事を謹んで希ひ奉る。

南無阿彌陀佛

感謝

我、他力の救濟を念ずるときは、我が世に處するの道開け、我、他力の救濟を忘るゝときは、我が世に處するの道閉づ。

我、他力の救濟を念ずるときは、我物欲の爲に迷はさるゝこと少く、我、他力の救濟を忘るゝときは、我物欲の爲に迷はさるゝこと多し。

我、他力の救濟を念ずるときは、我が處する所に光明照し、我、他力の救濟を忘るゝときは、我が處する所に黑闇覆ふ。

嗚呼、他力救濟の念は、能く我をして迷倒苦悶の娑婆を脫して、悟達安樂の淨土に入らしむるが如し、我は實に此の念によりて現に救濟されつゝあるを感ず、若し世に他力救濟の敎なかりせば、我は終に迷亂と悶絶とを免かれざるべし、然るに今や濁浪滔々の闇黑世裡に在りて、夙に清風掃々の光明界裡に遊ぶを得るもの、其大恩高德豈區々たる感謝嘆美の及ぶ所ならんや。

明治三十六年四月一日宗祖御誕生會
三河大浜町四方寺に於て
清澤先生

父を失なひ大悲の親を得

自在丸　伊惠子

有難い事には私の宅は先祖代々眞宗に御流れを汲んで居ました、そして私の小さいとき、御祖父さんは大變御慈悲をよろこび、常々寺の世話計りして居られました。

こんな家庭に成長したものですから、子供心にも佛樣は人を救ふて下さるゑらい人だと思つて、朝夕佛壇の前で御祖父さんと共に、御正信偈や御文樣を拜讀して居ました、處が御祖父さんは私の八歳のときなくなり亦御父さんも其翌年遂に空しく不歸の客となりました、其時分はまだ九歳位でありましたからそんなに悲し樣な感も起りませんでしたが、何分子供のときですから一寸人とでも口論致しますと、すぐ親なしなんか云はれますのが非常に悲しくなりまして噫々私にも御父さんが生きて居たら人からあんなに云はれはすまいものにと思ひまして、幼な心にも時々父を恨んで居りました。殊に私は大のまけをしみの強い方で御座りましたから一入口惜しくて、蔭では幾度か泣いた時もありました。

追々と年をとるに從つて、いよ〳〵御父さんが居たらどんなに嬉しかろうかといつもそれ計り思つて居ました、そうしてゐる內高等小學校も無事に卒業しました、何分田舍の事で、まだ高等小學すら行かないときですから無論女學校何かに行く人はありませんが丁度其時大分に六ヶ月の講習があるから、是非行くがよいとすゝめて下さいますから、無理に御母さんに御願ひして勉強にと出掛けて行きました。

今迄は世の中に出た事もなく、只母の處に居つたものが、俄に遠いしかも寄宿舍生活をしたものですから、只心細くてなりませんでした、それに人の樣に兩親揃つてあればそうもありませんが何分御母さん一人と姉と弟ばかりですから一入宅の事が氣になりまして、時には一人で隅の方で泣いた事もありました。

こんな時は、何も之と云ふ便りとする者もありませんからすぐと佛樣が戀しいような氣持ちになりました、それ故誠に恐れ多い事ですが自分で筆をとつて南無阿彌陀佛と紙に書きまして四方は一寸きれいな紙で都合よく貼りまして自分の机の前の柱に掛け其から御手珠と御線香を買つて來まして此度は茶椀を以て下女の處に行き人のまだ御飯を頂かぬ前少し計りもらつてかへり、次に小さな瓶に草花をさし之を例のかいた佛樣の前に御備へして御線香をたき手珠つまくりつゝ一生懸命御念佛を稱へてゐました、まだ其時分は若い學生計でしたから俄にこんな事をしたので大變に皆さんから笑はれました、しかし此時は夢中となつて居ましたから斯うして御念佛を稱へて居たら必ずよい事があるに違いないと思つて幾ら人に笑はれても一向平氣で毎日例の如く一日も怠らずして居りました、しかし心の底から有難くも何ともありませんでした。

そうして居る內六ヶ月も夢の如くに過ぎ去りて、私もなつかしい御母さんの處にかへりました、然るに今迄他人の中に交はつて居た時の樣な悲しみはなくなり、只和氣靄々たる家庭の內に日々樂しく暮して居ましたものですから佛樣の事は忘れて仕舞ひました。處が突然都合によりまして再びなつか

しい母の許を去つて京都の或る女學校に入學しました、斯うなると人間も誠に勝手のものです、また〳〵佛樣が戀しくなりまして丁度大分に居たときと同じく御念佛を苦しまぎれに稱へて居ました、しかし自分に少しでも愉快の時には忘れて御念佛も出ませんでした、この通りに或時は樂しんで見たり又煩悶して見たりして日を過して居る內私の一身上に色々の心配事が起りました斯んな場合は猶更御父さんが居たらどんなに頼みになるだろうかなど思ひまして一人で煩悶してゐました。こんなときには益々苦しまぎれに御念佛ばかり稱へて居たが少しも有難くもなく、只ためいき計りついてゐました。

丁度其時は國から上京してゐた友と法華宗の大本山の內の寺に宿してゐました、其友なんか丸で宗教心がないから、私が御念佛を稱へて居ると時々は吹き出して笑つて居ました、しかし其時は矢張恥かしくも何ともありませんで反つて自分の苦しい時に笑はれるのが腹が立つて仕方がありませんでした、斯る間に光陰は矢の如く月日に關守なしとかで、三年もまた〳〵ひまに過ぎ去りまして、私も卒業者の一人となりまして、目出度歸國しましたのは丁度昨年の四月十九日でありました、國に歸りまして後も、私の問題はいよ〳〵強くなりまして私をひどく苦しめました、しかし幾分かは母や妹に慰められてゐましたから佛樣の事は再び忘れました、こんな場合に當りまして、私は眼が兼て惡しく御座りましたから、此度歸國したのを幸ひ治療するがよかろうと御母さんが勸めて下さいましたから、毎日一里程あるところに通つてゐました。

斯くして二ヶ月も經ちまして後或る夕方二人の若い書生が私の宅に參りました、そして其方は未だ一度も見た事も聞いた事もない人でした、私は怪しく思ひまして御母さんに問ひましたら私も知らないが今話をきけば何々とか云ふ方で一人は其方の寺の番僧さんであると云ふ事を聞きました、私は怒つた樣な顏をしてゐましたが御母さんに叱られまして仕方なく挨拶に出ました、色々と話を承つて見ましたら私の處と少しはなれてる寺の方で今迄京都の佛教大學に入學して居たが家事の都合上四月頃歸國して今年は國で勉强するとか申してゐました、其時其人の御話をなさる間にも何だか愉快らしく見えました私はなぜあんなにこ〳〵してゐるのであろうかなにか思ひまして腹が立つ位でした、其日は京都の名所古跡の御話し位でかへられました。

然るに又其翌日例の如く入らつしやいました。私はいよ〳〵あやしく思ひまして腹が立つて仕方がありませんから、妹と二人で蔭の方でぶつ〳〵つぶやいて居ました御母さんも少し不思議に思ひつゝも挨拶に出ました、私と妹はしばらく出ないで蔭から見て居ましたが如何にも愉快らしく何處となく普通の人と違つてゐる樣に思ひました色々の御話の間にも其方が何だか云ひた相な風に見ゑました、其時御母さんは突然其方に問ひました、あなたは御寺に御生れなすつたから定めて御說教が上手で入らつしやいますでしよう、私も寺には常々參りますが未だ未來の安神心がどうしても出來ません、しかしまだ御年が若く御座いますから、矢張り御說教本を御讀なすつて、其を覺えて其通りに御話しするのでしようと、何氣なく問ひましたら其方は今迄の優しい顏を一時に變えて、

夢中の有樣で次の如く云はれました。私は今の說教してゐる坊主とは大反對です、口には念佛稱へつゝも第一信仰なくして人にはやれ、きけとか何とか云つて自分は說教本を暗記して其通り話してる。こんな死んだ坊主があつて反つて尊き佛の本願をきず付けて仕舞ふ、だから聞く人が分る筈がない實に殘念でならないと云はれました、其の言葉は如何にも切で一言一句皆肺肝から出ました。今迄此の樣子を見てゐました妹と私は餘りの熱心にあきれて思はず前に出ました。

御母さんも大變若い人に似合ないのにあきれて、どうかしばらく御はなしをきかして下さいと、御願ひ致しましたら非常によろこびまして、實は御宅を訪問致しました目的は、此の尊き御佛の御慈悲が聞いて頂きたい許りで、最前から云ひたくて待つてゐましたのです。實に有難いです、どうかこの信仰は一つ何はさて置きても御求めなさい、私も以前は斯々の次第であつたが、京都である一友人が突然訪ふて下さつて其方の熱心と佛の大慈悲により、今日は實に愉快な身になして頂きましたと色々有難き御はなしを承はりました、そして懷中より一冊の歎異鈔を出しまして讀みつゝ如何にも有難そうにしてゐました。それから妹と私に向ひまして人間は如何しても自己の力を以て諸の外的內的の惡魔に打勝つて諸方面に向つて行くことは六ヶ敷い、もしも自己以上の力が來たら、滅茶〳〵にこはれて仕舞ふ然るを一度如來を信じて御光に輝され佛陀の信仰の大地盤に立てば始めて人生の解決も出來目的も達せられ眞の大活動も出來、今迄人生に於て不愉快と思ひ煩悶せし事も反つてよろこびとなる、實に是れほど無限の力は外にない、實に〳〵有難いものです、早くあなた方も信仰を求めて勉强したら如何なる事も出來ぬと云ふ事はありません、とさも愉快らしく御話しになりました、私も大變心が動きました、あゝ今迄は佛法は老人のなぐさみ位のものと思ひ死にぎはに一寸寺參りして御念佛を稱へひへすれば極樂參りの出來るものゝ如く考へ又念佛を稱へさへすれば必ずよき事ある如く思ひしは大きな誤りであつたことの今更可笑しくも又はづかしくもありました。

然るに人生上に於て斯る利益あるとも今迄知らなかつた、若し宗教によりて眞の人生の意義が分り、又成功とか活動とかが出來るものなれば、直に自分も信仰と云ふものは是非非求めたい、殊にあんな若い書生すらあの通り夢中でよろこんで居る、人のよろこばれるのに自分も出來ぬ事はないと、色々の事を考ふれば考ふる程信仰は必要なものであると思ひました、それで妹と相談して本家の豐子さんに、其人の御話しした通りをきかして、共に信仰を求めようと云ひました、處が何分學生ですからそんな人生の意義が分り、又活動の出來る信仰なら是非共聞きましよと大變よろこびました、それから毎日御母さんと私共三人と其の御話しを承つて居ました處が不幸にも妹は元來眼病の爲め女學校に入學して一ヶ月も經たぬ內學校を止めて、丁度一年間程になります、然るに此頃になりまして日に增し惡しくなりますので殘念ながら中途にして福岡大學病院に入院いたしました。

其後は私共三人で毎日〳〵其方の御話しを聞いてゐました、しかし私は元來如何あつても信仰は得たいものとは思つ

て居ましたが、何が何やらさゞ張り其佛樣の御慈悲とか何とか云ふ事が丸きり分らない者ですから、聞きつゝも面白くもなければ有難くもない、理由が分らないから信じられもしない。ですから、あきて來て時々は聞きつゝも淺間しい事ですが居眠りをした事もありました、私は如何しても佛樣の御慈悲が分らないと或る時云ひましたら、それはまだあなたが眞に求めて居ないと云はれました。しかし自分ではこんなに聞いてゐるのにどうして分らないのであろうかと思ひました、幾ら聞いても少しも分らぬからもう馬鹿らしくなりまして、こんな事をいくら考へても勉强も何も出來ないと、机に向へば又信仰の方が氣になつて、あゝ自分は一體何の爲め勉强してゐるのであろう、又たとひ勉强しても只今死んだらどうなるだろうかと考ふれば考ふる程苦しくなりまして、何をしてよいやら分りませんでした、勉强しても居られず、信仰を捨てゝ置く譯にも行きませぬ。

そうしてゐる内に每晚御話しを遲くまできくものですから治療して居た眼は返つて惡しくなり、信仰は得られない、自分の問題には煩悶する、とかく正道に向へば、惡魔が邪魔して色々の事を云ふし實に苦しく御座りました、いよ〳〵馬鹿らしくなりまして此度は罪もない其人迄恨みました、あ、彼人が初めから信仰とか何とか云はなかつたらこんなに馬鹿げた問題にも取付きはすまいものにと思ひました。私は或る晚のとこんな事を云ひました、私のこんなに苦しんでゐるのに私には分らし下さらん佛樣は慈悲の塊りとか何とか云ふが實に偏頗である ■或る一人には信仰を與へて、私ばかり下さらん、平等であつたらこんなに苦しんでる私に下さる筈である、救ふて下さるとか、平等とか他力とか廻向とか云ふがあれはうそだ、あんな佛壇とか何とか云つて、ヒカ〳〵ひからして居るが、人を救ふてくれない樣な佛樣であつたら、佛壇も何も打壞して、庭の先にほうり出した方がましだと一生懸命佛樣を罵り怒りました處が、其人は幾らあなたが佛壇を燒いても壞しても佛樣は少しも腹も立てねば怒りもしない、そんな事をするあなたが一入可愛想であると思つて、兩眼から涙を流して見て入らつしやると、大變佛樣の御慈悲の御手强い事を御話し下さいましたが少しも有難くも何ともなく、反つてそんなに惠み深き佛樣が分らして下さらんのが一體譯が分らないと思つて人を馬鹿にする樣で、にくらしくてなりませんでした。そして今迄は御禮もし御佛飯も備へてゐましたが、腹が立つものですから御佛飯を上げるのも御禮をするのも止して佛壇を見るのも嫌になりまして、時には、佛樣の御姿が眼に入る時は人の知らぬ樣にらんで居ました。そして彼人が色々と有難い分り易い樣な書物も何冊も貸して下さいましたが、分らないからよみませぬでした。

そして一人で心の中では矢張り如何して誰よりも一番に信仰が得たいものだと深く思ひましたが、知らぬ顏してゐました、そうして二三日經ちましてから、或る夕方私と豐子さんと叱られるのも構はないで、彼人の御宅を訪ひました、彼人はいつもに變らぬ愉快そうな顏つきで、私共を一間に通しました。實は其晚は私は心の中では苦しくて仕方がありませんでしたが、例の私の强情張りてそんなに聞きたい樣な風もしません

でした、しかし何だかばかんとしてきまりが惡しく御座りました、彼人は即ち自分を導いて下さつた人なんか話しましたら、私は腹が立つてゐますからこの人の風は變だ、可笑しい顏付きをしてゐるなんか、豐子さんと只惡口ばかり云つてゐました。

しばらくして、彼人は如何ですかと御問ひになりますから、私は幾らきいても分らず、只苦しくて腹が立つばかりですと云ひました、彼人は熱心に御慈悲を御きかせ下さいますが私はもう分らなくなつて一入佛樣がにくらしくてしかたがありませんから、佛樣の惡口ばかり云つてゐました、彼人が餘り何とも知れぬ事ばかり私と豐子さんが云ふものですから大きな聲を出して叱り出しました、あなた方は一體此の世に何のために生れて來ましたか、人生の意義も分らず勉强して如何するのですか、やれ目的とか、活動とか、理想とか云つて居るが、人間にして人間でない、生きて居て精神は死んで居る、そんな精神で活動とか何とか生意氣の事ばかり云つて居て反つてあなた方の樣な者があれば、社會の利益にはならで毒となる、そんな人間は死んだ方がよい、もしも今夜中に、人生が解決が出來ねば潔よく自殺なさいと、非常にせめたてました。

こんなに云はないても腹の立つてゐるのに、色々と惡口を云はれたものですから、例のまけをしみて大變怒りました、だから二人とも彼人に後向になりました、彼人は私共の前に又進んで來ましたから私共は後へ〳〵と逃げました、そして此度は又御慈悲をといて下さいましたが、なか〳〵耳にも入りません、只もう殘念て〳〵佛樣を恨みました、あ、佛樣も餘りだこんなに苦しんでる私を救ふて下さらんとは實に口惜しい、自分に信仰があればこんなに馬鹿にされはすまい、信仰なき計りにやれ人間でないとか、社會の毒になるとか果は自殺せよとか、ほんとに殘念だ、あ、情ないと思はず涙が出ました、そして私はひどく決心しました、もし自分も是程までに惡口云はれて耐へて居られない、今夜中にどうあつても佛を信じて、信仰を得て、彼に仇を打つてやろう、もしも今晚中に信ぜられずば生きて居ても面目がないから、切腹しようと決心しまして一生懸命信じてやろう〳〵とすればする程心は暗から暗になつて仕舞ひました、殘念て〳〵てならない、あ、自分は生きると死ぬるの境である、どうして之が信じんで居られようとすれば、する程分らなくなつて、佛樣を恨み、彼に仇打ちをしたいと齒をくひしばり身體はすくばる程りきみまして、悶えましたが更に分りません。

餘りの口惜さ悲しさ、殘念さ、あ、自分は分らねは此まゝ切腹せねばならん、あ、どうして佛樣は信仰を下さらんであろうかと思へば思ふ程少しも分らない、もうあまりの口惜さ、あ、自分は切腹せねばならんと思つたら、たまらなくなつて大きな聲を出して其處に泣きふしました、あゝこのとき、あ、今迄私が惡かつた、あ、有難い〳〵と知らず〳〵御念佛が口に浮びました、此のときの嬉しい事と云つたら何とも云はれませんでした、そして何が何やらさつ張りわけが分らないで、只もう、あり難くて勿體なくじゝとして居られませんでした。

あ、今迄自分が此の佛樣御慈悲を信じてやろうなんか思つ

てゐたのが悪かつた、あゝ自分が知つてやろう信じてやろうとしたとの淺間しさ、今迄、佛樣を恨み彼人に仇打してやろうなんかした事の淺間しさ、慚しさ、あゝかゝる罪惡極る私を見捨て下さらず御救ひ下さつたとを思へば只もう有難いやらかたじけないやらで懺悔と感謝の念佛より外はありませんでした、丁度思ひ返して見ますと八月の十七日の夜で御座りました、其夜は何だか夢の樣で內に歸りまして只だ私が悪い、佛樣にすまないあゝ有難い〳〵と一夜泣き明しました、御母さんが一體どうしたのかと尋ねたそうですが只前の如く云つて居たと、朝話しました、

私はそんな風で二三日は丸で、夢の樣で丸て自分がどうなつたか何かさつぱり分らない。只この奴を見捨て下さらん佛樣の御慈悲が有難くて仕方ありません、そして今迄色々入らぬ心配してゐた事も、一時に心が愉快になり、又不足に思つた事に滿足が出來ました、あゝよきに思ひつきたるも御恩である、悪しきを思ひ捨てたるも御恩である、よしも、悪しきも皆是れ佛の御恩でないことは一寸もない。

よく〳〵過去をふりかへつて見ますれば私の早く御父さんになくなられましたのも又大分に居つたときや、京都に遊學してゐた時の事や、知らぬ人が私の宅を訪ふて下さいましたのも考へて見ればあの佛樣の御手廻してありました事があり〳〵と分らして頂きました、實に今から考へて見れば一つとして佛樣の御惠みでないとは一寸もありません、かゝる淺間しき罪惡深重の奴を一子の如く愛して、苦痛の起る時は色々御方便で御慰め下さいます、ですから、惱みも一時です、忽ちよろこびと變らして頂きます、實に佛樣の御恩の程と唯々感謝の至りにたえません。

彌陀の五劫思惟の願を能く〳〵案ずればひとへに親鸞聖人が爲めなりけり云云、實に私一人の爲めでありました。其れから今日に至るまで樂しく御慈悲の下で日暮をさして頂いて居ります、此の絕對無限の大慈光は何處までも、盡十方無碍と輝き渡ります、豐子さんも其翌月全じく如來の御光に照されて大變懺悔いたしました、其後福岡病院に入院してありました妹も子供心にも佛の慈悲の身に泌々と感せられず、且つ一年餘り病氣のため病院で非常に煩悶の結果、遂に次の御佛の御慈悲の網に救はれ、今日まで矢張病院で喜んで居ます、母も色々の心配や妹の病氣で心痛して居ました際私が突然上京して來たものですから、彼是と煩悶致しましたが有難い事には母もついに三ケ月前、非常によろこんで來ました。斯ふ云ふ風で御座りました私の家も御佛樣の御慈悲が入り滿ちて下さいましたから、たとひ同じ處に居ないですが、いづれ光明の內に生活して居ますから愉快で淋しい事も御座りません。

此度突然上京して來たのも又平生から一度先生に御目に掛りたいと思つてゐたのに不思議にも御目に掛る事も出來、其上毎週の日曜には御講話さへ承る事の出來るのも唯御佛樣の御計ひと思ひます、ですから勉强しつゝ毎日日曜を樂しみに待つてゐます。實に

如來大悲の恩德は
身を粉にしても報ずべし

師主智識の恩德も

骨を碎きても謝すべし。

如來の作願を尋ぬれば
苦惱の有情を捨てずして
廻向を首とし玉ひて
大悲心をば成就せり。

無慚無愧の此の身にて
誠の心はなけれども
彌陀の廻向の御名なれば
功德は十方にみち玉ふ。

南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛

先づ第十八の願に、十方衆生乃至十念せんに、もし生ぜずば正覺をとらじとたてられし、その十方衆生の中には男子も女人もみなもらさずとさだめられたり、されば男子往生すべくば女人また往生すべし、などか同じ本願にのれる機の、ひとりはゆき、ひとりはとゞまるいはれあらん、其上女性は障はり重ければ、しひてもや猶ほ疑はんとて、又第三十五の願にとりわきて女人を往生せしめんと誓はれたり、つら〳〵これを思ふに、打まかせては撰びこそ捨てられしものを、男子と共に願ぜられたるだにも有り難きに、あまつさへ女人をば懇に再びまで誓はれたる御慈悲のこまやかさこそ、まめやかによろこびも悲しみもあひなかばなれ、能く罪ふかき身なればこそ、返す〳〵は願ぜられたるらめと思ふは悲しけれども、また往生の易き事は本願に乘ずる故なれば、幾度も誓はれたらんこそ、喜びにてあるべけれ、既に男子はひとつの願に乘ずるを、女人は重ねてふたつの願に乘じぬれば、他力いよ〳〵つよくなりぬ、往生何のあやぶみかあらん、中々女の身こそ、そねましき迄浦山しけれ。

《行誡上人『をみなへし』》

講義

歎異鈔

近角常觀

第四章

慈悲に聖道淨土のかはりめなり、聖道の慈悲といふはものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり、しかれども思ふか如くたすけとぐることきはめてありがたし、また淨土の慈悲といふは念佛していそぎ佛になりて大慈大悲心をもつて思ふが如く衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとをしく不便と思ふとも存知の如く助けがたければこの悲慈始終なし、しかれば念佛もうすのみぞすゑとほりたる大慈悲心にて候ふべきと云々

抑々聖道淨土門と言ふことは、單に一代教を分類したのではない、實行的に聖道の辿るべからざるを悟りて淨土一門の開け來りたる實驗である。

全體聖道門といふは此娑婆世界に在りながら大覺の位に登ることを期する大聖の履み行かれた道といふことであつて、つまり釋尊か一代の間種々に說かれたる道はこれである、是れ決して惡しきにあらざれど、我等が律法的に行はんとするときは不可能である。此聖道門に對して佛の願力に乘じて極樂淨土に往生する道を淨土門と名けたのである。聖道門は大聖の行ひたる尊き道なれども、大聖釋尊の在世を距つること遙遠なる上に、又其說くところも高尙且幽玄なれば、我等凡夫が自力を以て律法的に行はんとするも到底行くことの出來ぬ道である、そこで淨土の一門は開け來りて男女老少善惡の簡びなく、唯信仰の一にて容易に攝取さるゝ道である。抑々聖道門を廢して淨土門に入るとか、難行道を捨てゝ淨土門に入るとか云ふことは、皆律法主義が破れて信仰が湧き來る實驗の外ならぬことを注意せねばならぬ。

慈悲に聖道淨土のかはりめあり、聖道の慈悲はものをあはれみはぐくむなり、しかれどもおもふが如くたすけとぐることときはめてありがたし。

今此章に慈悲といふことに就て、聖淨二門の區別を云ふてあるが、其意味を實驗的に一言に云ふて見れば、何人も出來得べくんば此世に在りて充分に人に情をかけ、人に助けを仕度いとは思ふところであるが、自力の慈悲を充分に行ふことは頗る六ヶ敷い、どうしても思ふ通りに助け遂ることはあり得ないと言ひ放つたのである。人生にありて如何にもして善き事を爲さんとか飽迄他に親切を盡さんとか企てるのは、言ふまでもなく自分は親切も出來、人を助くることも出來ると思ふからである、然れども此人生相對の世界にありては種々入り組んだ事情があり、無量の障碍かありて、迚も理想通りに行はれぬは勿論、我等人間の不完全なる、到底自己の力によりて釋尊の所說の如くに人を救ひ遂ること能はず、是人生の實際にして此章の示すところは正しくこの點である。此處を道綽禪師は大集月藏經を引て「我末法時中億々衆生起行修道未有一人得者」と斷言せられてある、然らは如何なる道によりて我々は助かるといふに道綽禪師は次に「唯有二淨土一門一可二通

入一路」と敎へられた、かく聖道律法主義に門戸か閉つると同時に、眼前に開け來るものは絕對他力救濟の淨土一門である。

此聖道淨土の二門の事を既に龍樹がまた難行道易行道と名けられた如きは一層適切なる實行的實驗的の言である。難行道といふは恰も峻阪嶮路を跋涉するものが或は躓き或は疲れて終には倒るゝに至るか如く此人生に在て何人にも親切にせねばならぬ、假令他か我を理解し得ずして、怨み怒りて大に我を苦しむるか如きことあるも我は怨に報ゆるに德を以てせねばならぬ、あゝせねばならぬこうせねはならぬと、入らぬ自の計らひを以て氣を配つたり人に氣を遣いたりするから頗る難行で能くその終あることは六ケしい。

私は信仰に入る前に苦しんだのはこの點である、如何にもして世の爲に盡さねばならぬ又人には善くせねばならぬ、先方が隔てても疑つても此方から開いて行かねばならぬと、色々と考へて見たが、どうしても屆かぬのみならず後には却て自分の方から右に隔て左に隔てするやうになつて、甚だ苦しんだとであつた。如此きものを向ふから隔てぬ友はなきか、捨てぬ親は無きかと求めた最後に初めてかく隔て苦むものを隔てず愛したまふ絕對の同情者は佛なりと廣大の佛の惠か向ふから屆いて下さつた、自分が如何に善くせんとし、如何に善くならんと計つてもどうしても屆かぬところに先方から顯はれて下さるのが淨土他力の一門である。此門は全く佛の御惠により先方より開け來る門である、此門ばかりが私の辿ることの出來た門である。此門は何人でも行く事の出來る道で易行道と名けた所以である、相對有限の人生から絕對無限の靈境に引入れらるゝ門戸は唯この一門である、唯有淨土一門可通入路といふは實に勤すべからざる鐵案である。法然上人が聖道門を閣いて淨土の一宗を開いて下されたも、全く上人が實驗上より來りた結果である、屢繰返す如く上人は出家以來種々の宗義を尋ね色々と修行を試み一切經を五遍まで繰返へして讀まれたがどうしても安心を得ざりし、最後に善導大師の「二心專念彌陀名號乃至順彼佛願故」の文に觸れて、忽然として佛陀の廣大なる惠の光を順彼佛願の上に認めて嗚呼助かる道は此本願を除いて外にはあらじと大安立を得玉ひた、依之上人一代の敎化は絕對的に撰擇本願の念佛を開顯せられた。

常に云ふことであるが、現今道を求むる人の大に注意すべき點は佛敎には多くの門戸がある、何れの道より入るも妨ある事なし抔と思ふて居るは大なる誤りであつて、信仰に入らんとするには大なる障りである、是の如き心得ではいつ迄も信仰に入る事か出來ぬといふことである、一寸考へれは佛法には八萬四千の門がある、之を分ては自力聖道門と他力淨土門とで如是ふ二門あるからどれからでも入り得るかの如く思ふであらうが信仰の實際はそういふものでない、退いて靜に我身の上を案じ見るときは何人といへども大聖の示し玉へる蹟は深遠幽玄にして如何にしても通り得べき道でないことは異論あるまいと思はれる、末世の道俗各自ら己が能を思量せよといふのは誠に親切なる敎である、よく〳〵自己の能を思量して自力の計をすてゝ願力に縋るところで自分も絕對界へ引入れて貰はれるし、絕對界に入り得ての上では又他のものをも同じ境に引入るゝことが出來る。

また淨土の慈悲といふは念佛していそぎ佛になりて大慈大悲心をもつて思ふか如く衆生を利益するをいふべきなり、今生にいかにいとをし不便と思ふとも存知の如く助け難ければこの慈悲始終なし、然れば念佛申すのみぞ、末とほりたる大慈悲心にて候べき

私は曾てこう思ふて居つた、佛敎は世を救ひ人を濟ふを本旨とするのである、當今佛敎の有樣は此社會人生とは殆と別物になつて居る、歎すべきことである、須らく大に社會事業慈善事業を起して佛敎の本旨をあらはし當時の缺陷を補はざるべからずとこう思ふて居つた、この見地よりすれは今此章に云ふ所は頗る了解し難いことになつて來る、どういふことであるかと怪んで居つた、然るに今より四年前父親の病氣の時に、傍に看病してゝ何とかしてもう一度本復せられるやうに仕度いものであると、色々心を碎いたが遂屆かない、人間のことは何事も因緣が盡きればそれ切りである、何と思ふて見ても人間の力で助け遂ることは極めて有り得ぬ事である。成程人を助けるの人を惡むのといふ事は立派の事に相違ない、殊に親の最期に自分の命を捨てゝ親の命に代らんと思ふは人間の至情ではあるが、實際は人力の及ばぬ事である、此時に唯一の力は佛陀の御慈悲一つである、此時佛の御慈悲なかりせば天に哭し地に慟するも仕方がない、此に淨土の一門のみありて通入すべし私の親は平日佛の御惠を喜んで居られたがまゝ〳〵南無阿彌陀佛〳〵と念佛を喜びつゝ如何にも平穩に念佛の息が絶へて極樂に往生して下さつた、其樣子は恰も障子を明けて中へ這入る姿を後から眺める如く思はれ、いかにも眞實證の極樂世界の有樣を此世から眺めさせて頂くことが出來ました、このとき初めて彼土得證の淨土門の味を初めて味はして頂き、同時に直ちに再び穢土の我等を顧みて濟度したまふ此世の親は未來の親となつて下さつた、どうしても如來の御惠にあらずんば到底助かること能はざるものと深く思はせて貰つて、初めて此章の有り難い事をしみ〴〵と知らせていたゞきました、親鸞聖人の和讃に

南無阿彌陀佛の回向の　　恩德廣大不思議にて
往生回向の利益には　　還相回向に回入せり

また

願土にいたれは速かに　　無上涅槃を證してぞ
すなはち大悲を起すなり　　之を回向と名けたり

とあります、還相の回向といふて別に頂くのではないが、廣大の佛の惠を喜ばせて頂く念佛の中に、この大利益が籠つてあるから、念佛の行者が極樂淨土に到ると同時に自然に還相利他の廣大の力用を現はし來るのであつて、此時こそ初めて生死の薗林の中に分け入りて思ふか如く先づ有緣のものを度することを得るのである、然れは念佛は實に末とほりたる大慈悲である、念佛していそぎ淨土に參りて、大慈悲の佛となりたいものであります、而して如此考へ來つて見れば我等か此人生にありて人の爲に盡すの或は世の爲にするのといふても、凡夫の小さい計らいに過ぎぬ、決して末遂るものでない、この些細なる凡夫の所作をば佛陀廣大の御惠に比べて見れば慈悲だの善根だのと名くべき程のものでないといはねばならぬ。

嘆　咏

雪　子

左　千　夫

年は二つ幼兒(チゝナゴ)ゆき子
月讀めば一とせと七月
汝はいくつと人がいへば
指を示す玉の如き指

汝が母はといへばしが母を
汝が父はといへば吾を指さす
一の姉も知り二の姉も知り
三も四も別ち知れり

物乞ふ時は人の手を引きゆき
物のところに其物を指さす
樹の鳥を見ては悅んで笑ひ
繪の鳥を見ても又悅べり
日の出づる時月の出づる時
之を指さして且つ悅ぶ
鳥と知らず日月と知らず
雪子は只面白きを知れるらし

世の中に雪子が知れるものは
面白きものとなつかしき人と
自らがほしき物のある所とのみ
明日を知らずきのふを知らず

禍を知らず愛を知らず
自らが何物たるをも知らざるなり

智識の彼は此の如く幼兒なれど
自然の彼は賢か聖か將た神か
由伎兒が戯れて遊ぶや
其時に彼は哲學を知れり
胃に酸を覺へて壁土を食むとき
ゆき兒は能く醫藥を知る
身に痛みありて母が乳房にすがるとき
由伎兒はまさしく宗教を知る
左手に花を持ち右手乳を弄ぶ時
由伎兒は詩を知り趣味を解く
ゆき兒が喜んで叫ぶや
何の音樂か其聲に比すべき
ゆき兒が手を擧げ足ふみゆくや
何の舞か斯く面白からん

頭にいたゞく柔かき髮
身にまとへる罪なき着物
暴惡も怒ること能はず
佞奸も憎むこと能はず
其手と足と目と口とを見よ
いづれの所にか汚れを認めうる
手も聖足も聖目も口も聖ぞ

一目雪兒を見れば忽ち吾を忘る
吾を忘れたる時樂み深く極りなし
何故に然るか抑もゆき兒は神か
吾はゆき兒によつて來世を思ふ
うき汚なき世に染まぬ雪兒
其雪子の神なる現身に
見るべし淨土極樂の俤を

吾は雪兒によりて吾來世を知れり
あはれ尊ふとき幼兒由伎兒

短詩

甲之

身を地に投ぐれば
うまし思心に湧く
ああそのうましさ。

○

我を忘れ語る言葉
心を傾けつくせるふるまひ
ま向ひ見れば人の世わすする。

○

外によそほふうれしき姿の
うらには悲しみしくしく集る、
憂ひの面わに輝く光よ。

○

心の行くへに運びし其足
纜きれたる小船のさまかな
生のあひだをさ迷ふ苦の海。

○

人の心に知られぬ力
驚くまあらせず
吾身にそそぐああ全たき力。

行誡上人

南无と思ひ阿彌陀佛といふ外はいふ事もなし思ふこともなし
うちかへし思へば春のあらを田も菩提の種をまくところなる
西に入る心ばかりはひさかたの月のかげにもわれはおくれじ
時しあれば松もたきゞとなりぬなり何を常磐のものと定めむ
もみじ見し秋はきのふの夢のまに世はふり變はるむら時雨かな
何事もきのふの夢ときゝながらなほさめかぬるわが心かな
高野山こけのとぼそはしづかにて音もきこえず春雨のふる
忘れてはよその木末とおもひにき阿耨菩提はこのみなりしを
西へゆく道ひとすぢにまかせてむなみも炎もあとに見なして（二河白道）

紹介

◉哲學と人生　文學士　朝永三十郎氏著

著者朝永文學士は久しく大谷派眞宗大學に在りて哲學の講義を擔任せられ、吾が宗門教育の上に其力を致されたること、實に十年一日の如し、而して氏は側らに讀書講究に餘念なく、暇あれば常に研鑽の業に從はれしが、今や氏が卓識と博學とは隱然斯界に重きを爲し、今回轉じて京都帝國大學に哲學の講座を分擔せらるゝに至れり、吾人は氏が榮轉を祝すると共に吾が教界の爲めに永く此の良師友を失ひたるを悲み、更に感謝の情に耐えざる者なり。今本書は氏が哲學雜誌丁酉倫理講演集教育學術界、其他本誌等に掲載せられたる論文講演の筆記短篇等の中より相補足して系統的に編纂し一卷として公にせられたるもの、卷頭氏が自序に曰く「題して哲學と人生といふ所以の者は一は本書の內容が斯くの如く純粹の哲學上の問題と人生の特殊の問題とに亘つて居るといふ故にもより、一は其人生の特殊の問題に對する著者の態度にも……幾分か著者が半生習得せる專門の賦彩を留め居りはせぬかといふ寧ろ臨氣なる希望にもよるものである。唯其專門の研究の上に於て何等の創見もなく、多く史實の客觀的叙述に止まるは著者の深く愧るところである云々。」然れどもこは固より氏が篤學の餘に出でたる卑謙の語に過ぎず、斯學に絲道き吾人と雖も一讀の際到る處に耳新らしき古今哲人の性行、深邃なる思想を敎えられ同時に所謂人生の特殊の問題に對して飽迄公平に飽迄精確に飽迄謙遜に飽迄哲學者らしき氏が批判に接しては假に斯學に對する從來に無き興趣の湧發するを措く能はざりき。況んや多少の研究ある人士に取りては蓋し其益少々に非らざらん、讀者の便を計りて其大項を擧ぐれば曰く一、哲學と哲學史、二、「ロマンティック」の哲學(本篇は更に十節に分たる)三、希臘民族の哲學的素質(本篇は四節よりなり)四、汎心論の難問と其解答(本篇も亦四節に分つ)五、布臘人文の特性を論じて我邦人文の將來に及ぶ六、「ドンキホーテ」式と「ハムレット」式七、宗教と道德の關係、八、筑の醇化、九、心靈上の個人衛生と公衆衛生、十個狹の學風、十一、小乘的思想、十二、學究逸錄の十二篇にして頁數凡て三百六十二、裝幀頗る清洒を極む。《發行所　京橋區隆文館　定價壹圓》

◉信仰と修養　齋藤唯信師著

佛教界篤學の士として齋藤師の名は既に世人の熟知せるところ、今本書は今春四月十四日師が慈母の十七回忌法要を營まるゝに方り往事を追懷して感禁に難く、紀念として平生首說せられし舊稿を集め出版せられたるものなりといふ。凡て十八章より成り、初めは廣く佛教の教義を基礎として夫より或は論理上より或は實際の上より漸次に吾が絕對他力信仰の上に說き及ぼし、更に進みては他力信仰の極致をも開明せられたるものなり。唯吾人は其の飽迄說明的にして、遂に師が實驗の披瀝を聞く能はざりしを憾むと雖も、又平易簡明の理に自から師が多年の蘊蓄は何處となく發揮せられ、卷を措く能はざらしむ。猶ほ吾人が一讀の際第一章に感じたるは師が文體と謂ひ、思考の經路といひ、如何にも能く村上師に酷似し給へる點なりき。今第十二章「他の信仰極致」中より一節を抜くこと次の如し《發行所小石川區淸々洞出版部定價貳拾五錢》

今親鸞聖人の語に、某は善もほしからず、又惡もおそれなしと言はれたは何故であらうか、……善のほしいと云ふは善を未だ吾身に得ぬからであり、又惡をおそるゝは惡其者に我身がさまたげらるゝからである、然るに聖人は自己の心の中に彌陀の本願を信ぜらるゝと同時に萬善圓備の嘉號たる至完至善の六字の主となりぜられたる故、善として此善已外に求むべき者なく、惡として其惡をさまげたる程の惡なきが故に、善もほしからず惡もおそれなしと仰ぜられたので、他力信仰の極致は實に此處である云々。

◉三度の願　巖谷小波氏編

世界お伽噺の第九十六編として例の小波子がデンマークお伽噺を紹介ぜられたるものなり。貧家の一少年が一尾の鯉を助けやりたる報酬として鯉より何ごとにても三つの希望を叶へらるゝ事となり、洗濯板に乘りて空中を縱橫に飛び廻ぐり、遂には國の皇女を得て一生を榮華に終るいふ極めて面白可笑しき筋にして、此道にかけては獨得の氏が筆なれば固より惡るかるべき筈はなく、百篇の豫定なりし世界お伽噺も今や進みて九十六編に至り、殘す所が僅に四編、氏が此迄の辛勞實に察するに餘りありと云ふべし、猶ほ從來本誌へは每編とも寄贈の榮を辱うせるに係はらず、常に紹介を怠り、氏が厚意に背きたる段は吾人の深く謝する所なり。《發行所日本橋博文館　定價八錢》

◉自然の妙趣　理學士　石川成章氏著

本書は石川學士が專門研究上最も親近ぜらるゝ自然界の妙趣妙用を縱橫より觀察し國を穿ち微を探り、而して氏が平日信奉ぜらるゝ佛教の妙諦に論及ぜられたるものにして章を分つ事五、第一章修養閑話は自然觀察の四方面、春の自然觀、夏の自然觀、秋の自然觀、冬の自然觀の五節に分たれ、第二章は古人の修養と題して、演劇『地震加藤』、大石良雄と其雪和尙、人格的感化の三節よりなり、第三章は今人の修養にして、振天府拜觀記、波動、包容と排斥、感謝と慚愧の四節を含み、第四章は感光淸談の題下に、福壽草、信仰の妙味、信者の態度、佛陀の心、今日、夢想と現實の六節あり、最後の第五章は時論一束として、死佛榮と活佛教、一世紀後の我宗教界軍事教育と宗教々育なる三篇の氏が時論をも編入せられた

り、蓋し自然界の研究は現時の佛教界に在りては氏が固有の領土たるべく、而も之をやるに、或は古今の詩歌俳句を引用し或は聖人の和讃、或は古來の高僧碩學等の遺訓をも挿入し、更に氏が特有の活殺自在、五彩燦爛の文章を以てしたれば讀者は趣味と教訓とを同時に併受し得らるべく、殊に『地震加藤』の一節の如きはさながら眼のあたり演劇を見るの思ひあるべし。其他多くの珍らしき逸話に富む等、之を宗教の上より見るも之を科學の上より見るも、將た單に趣味的著作としても何れの方面よりしても手を離しがたき良書といふべし。唯其余りに趣味的にして純信仰の書と稱せんには幾分の疑あるを惜む。吾人は著者が向ふ所殆んど不可あるなき才腕に對しては實に敬服に耐へざるなり《發行所　京橋區築地　山中孝之助定價四十錢》

◉淨土文類聚鈔　百六拾題決擇記　前後兩篇　稲葉敎山師著

題名の如く親鸞聖人の御製作にかゝる淨土文類聚鈔中より初學の便をはかり一百六十有二題の論目を設けて一々懇篤に之が說明を與へたるものにして、本書の特長は更に著者が私見を交へず、專ら先德の指南に據られたる點にあり。されば未だ眞宗相傳の教義に經驗無き諸君が其一班を知らんとするには甚た恰好の書籍たるを得べきか、行文の稍難解なると紙質の粗惡なるとを遺憾とす《發行所　京都　㊟法館　定價未詳》

時報

本年の夏期傳道

拜啓、近角事例年夏期に於ては休暇を利用して各地の招聘に應じ傳道に從事致し居り候が、殊に本年は全國各地に亘りて信仰の機運頓に純熟せるものと見え、今春以來諸方面よりの切實なる申込もだし難く彌々前號豫報の傳道日割にて、七月十四日横須賀に向ひ出立仕り候、同氏は横須賀求道會にて講演、其翌朝直ちに關西佛教青年講習會に列席すべく京都に向け出發の豫定の處、折惡しく數日來の降雨にて馬入川出水汽車不通となりたる爲め餘儀なく一日間は鎌倉に滯在、汽車の開通をまちて匆々西下候へば再び大井川汎濫汽車不通といふ次第にて、更に靜岡にて一泊翌朝渡船の開始と共に漸くに西下の道を得候由に候、此爲め關西青年會への出席二三日の遲延を來したるは誠に遺憾の至りに候ひし。關西青年會は二十日にて閉會、廿一日より五日間は廣島なる佛教講習會に臨席致し候、夫より歸途廿六日には播州なる後藤葆眞師の寺を訪ねて故祐護老師の墓前に參拜致し、猶ほ同寺の御同行と一席法味を讃歎致したる後ち直ちに神戸に出て、廿七、廿八の兩日は同地佛教青年會にて五席に分ちて「佛教の眞髓」を講話致し、廿九日の午後四時頃を以て恙なく江州なる母の許に歸省仕り候、神戸にての講演は幸に同地の山本陸次氏が御厚意にて筆記を御取り被下、本號卷頭に掲載候もの即ち之にて

御座候、郷里にては此時丁度新法主臺下より御下賜相成りたる亡父の法名、表裝新に成りて到着候もの故　亡父の辱知二三氏を請じて開眼の讀經を營み滯在は前後三日間、卅一日の未明には再び傳道の途に上り其夜は金澤に一泊致し候、こは同地なる親戚の墳墓を展せんが爲めにして、翌八月一日は早朝より散在せる數箇所の墓前に參拜の上、夜に入りて越中井波に到着、其翌二日より五日迄の四日間は同地に開催の井波佛敎講習會にて講演致し候、夫より轉じて飛驒高山に向ふ二日間の道中は隨分難路にて、山路にかゝりてよりは無論人車は通はず、人足を雇ひて徒步跋涉致したる由に有之、去りながら暑中淸流に沿うて山間を旅行するの快は復非常なるものにて候ひし由、度々の端信を得候、高山講習會へは八日より十一日迄の四日間丈け出席、十一日よりは又々飛驒より信濃に出づる旅にかゝり候、此の二日間の山路は前にも勝る險惡にて、殊に十二日の如きは山中行けども〳〵人家を見ず、彼れ是候間に俄かに大雷雨となり、全身づぶ濡れと相成りたる由、其の中に人家を見出して漸くに辿りつけば茲は野麥と申し日本にて人家ある最高所にて、此のあたりは人も餘程異樣の風體をなし居るとの事に候、其夜は茲にて一泊を請ひ、十四日に松本に出て十五日より一週間は例年の如く信州北部修養會に出席致たる由、此の修養會に出席するは今年にて丁度續けて六年目に有之、誠に宿緣深厚の地に御座候、此會閉會の後は廿三四の兩日間飯山なる修養會に列席致し、今廿六日頃は既に越後に出て、水原なる青年會にて開講中の筈に候。猶ほ今後長岡、柳橋、吉田等を經て九月十五日第三、求道學舍日曜講話迄には是非とも歸京の豫定に御座候、

偖て以上は客月以來の近角傳道の概略に候、實は近角事信州飯山に滯在中本號時報欄に當つ可く詳細なる傳道記を執筆致し、確かに送附致たる筈に候へ共、今回の暴風雨にて鐵道缺損致したる爲めに哉、原稿締切りの今日に於て未だに到着せず乍去各地方の同情者諸君には今後の動靜御案じ被下れ候方も有之可くと存じ候儘一寸概報申上げたる次第に候、願みて思ふに今回は實に二ヶ月に渡る傳道に有之り、更に本年春季の四國西國の傳道を合すれば今年は殆んど全國を一週致したる有樣に候、此れ全く大悲矜哀の御手の今や全國に普ねからんとして各地の諸君が求道の念彌々切實なるが然らしむる處にまことに感涙に堪えざる義に候、猶ほ此の長日數の間幸に佛陀の冥祐を仰ぎ身に一日の微恙だになく益々頑健に傳道の業を全うせしめ給ひしは是又眞に喜びの中の喜びと存居候、殊に近角事本夏は信濃飛驒地方の山間を經由候爲め却て祖師聖人が七百年前に於ける信越地方の御苦勞を回想せしめられ一層悲喜の涙に咽びたるやうに申越し居候、終りに臨みて傳道中は到る處各地の諸君が非常の同情を以て種々の便利と特別の優遇とを賜はり候段、實に有難く茲に謹みて奉感謝候也　敬具

（八月廿六日）

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁弛み去りて、人皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まむとして胸中幾多の苦悶を抱き。社會實務の人にして、且志操淸淨なる人は、其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志如此切實なるは未だ嘗て見ざる所也。

昨年已來、聊か此時運の必要に應ぜむとする微志より、先輩の企てられし跡を引き繼ぎて、一方には求道學舍を設け。此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同しくして共に實踐躬行に勉め、又一方には日曜講話を開きて眞面目なる人々と共に心を潛めて信仰の問題を講じ、互に心靈の修養に從ひしが。幸に佛陀の冥祐と、師友の同情とによりて其期する所空しからず。學舍は常に滿員にして幾多の申込に負き。假會場に充てたる居間は常に狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す。幸に篤厚なる先輩の指導に從ひ、忠實なる親友の贊助を仰ぎ、着實なる實行によりて漸次其結果を擧げむこと是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛敎徒に屬する會館の設なく、其不便を感すること一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未だ容易に成効の曉に達せざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり。故に先づ現時の必需に應すべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進まむことを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛敎者一般の需要に充て且つ淸潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初めとして、幾多の社會的施設を詳細に調査し來りて、此等の事業の我國佛敎者の手に成らむことを望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得ば幸之に過くるなし。冀くば四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹て白す。

明治三十六年十月

發企者　近角常觀

近角常觀著（第九版出來）

信仰之餘瀝

定價拾五錢
郵稅貳錢

近角常觀著（再版準備中）

人生と信仰

定價貳拾錢
郵稅壹錢

近角常觀校訂（再版出來）

冠頭 歎異鈔

一册郵稅共七錢（定價五錢郵稅二錢）
但三册までは郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

近角常觀著（第三版）

懺悔錄

定價貳拾錢
郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區春木町二丁目二十一番地 森江分店
賣捌所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

規定

一、本誌は毎月一回發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一册
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治四十年八月二十四日印刷
明治四十年八月二十八日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所 求道發行所
東京市神田區神保町
大賣捌所 東京堂

求道第四卷第五號　明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認可　明治四十年八月廿八日發行（毎月一回發行）

前號要目

求道
◎信は生命也　感謝
◎聖人の一代◎慈父釋尊◎攝取不捨の聖　講話　近角常觀
◎自然法爾法語
◎憶念　告白　近角常觀
◎遂に他力に入る　岩井三子

嘆詠
◎娑羅雙樹（短歌）　左千夫
◎夕の感（長詩）　增田甚
◎みだれの頃（短歌）　巖眞
◎甲州行（短歌）　志都兒

時報
◎九州傳道日記　旭村生
◎求道學舍第一第二求道會講話題◎夏期傳日割